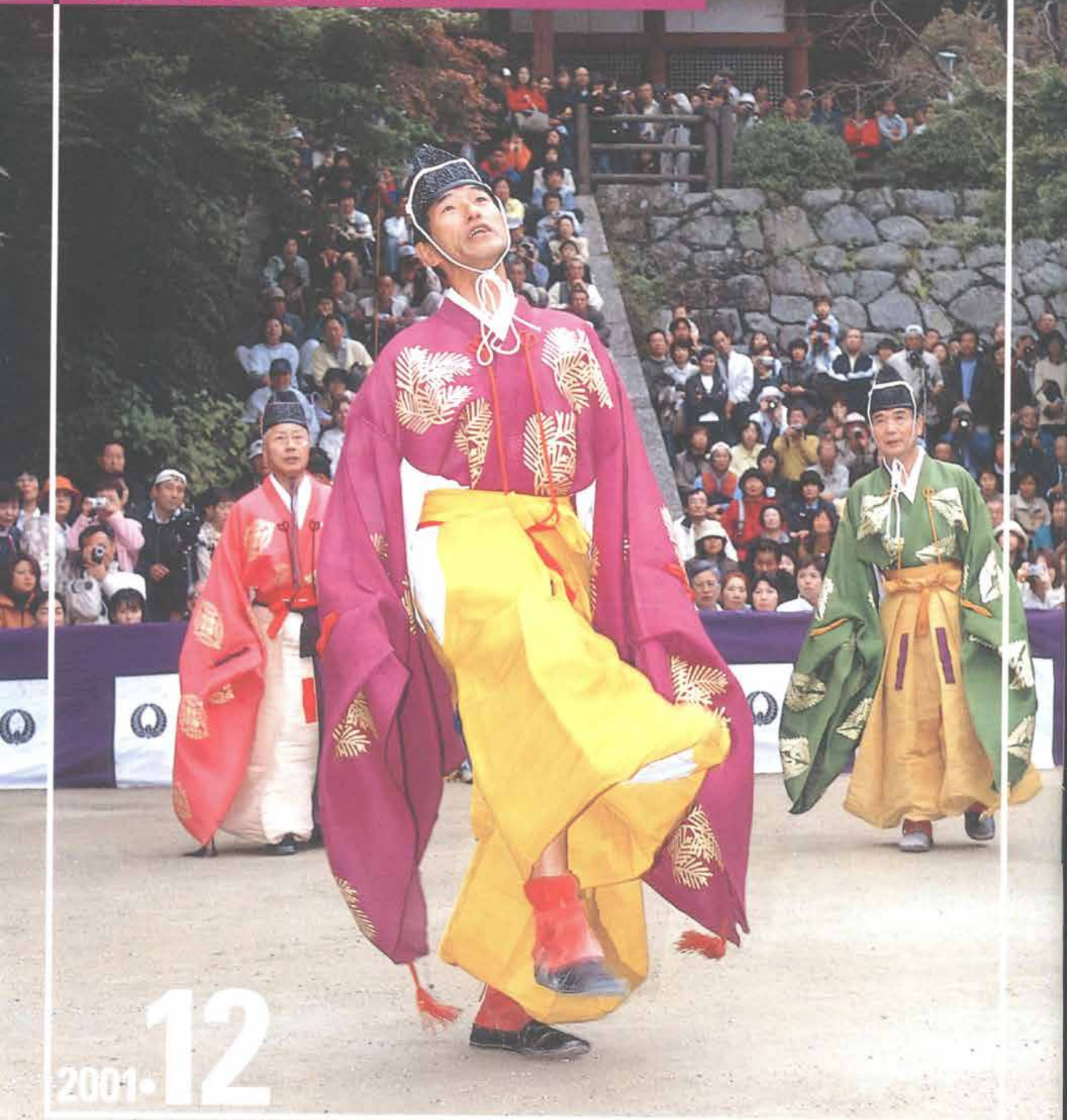


明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：音楽でまちおこし



2001・12

特集

音楽でまちおこし

目次

音楽文化の基礎づくり、スタート地点に	佐野光司	桐朋学園大学音楽学部教授	4
20世紀の文化残すレコード館建設	北海道新冠町・中村修二		8
日本最大のストリートジャズフェスティバル	仙台市・根本茂		10
世界各地のギターを集めた文化館	茨城県八郷町・久保田克己		12
世界に発信するサイトウ・キネン・フェスタ	長野県松本市・坪田明男		14
愛知交響楽団を中心にまちづくり	愛知県岩倉市・今枝幹夫		16
ストリートミュージックで震災復興	神戸市長田区・川野欣樹		18
地域に根付いた音楽文化活動	山口県周東町・山口祐司		20
豊かな心育む音楽施設を整備	香川県志度町・石原龍仁		28
海と大地の交響曲有明讃歌を制作	福岡県有明広域市町村圏・中尾清志		30
●英語エッセー			
行政バラダタイム・シフトへの対応	相川宗一（さいたま市長）		3
●コラム			
お国訛りの失敗	田谷聡（石川県企画開発部長）		22
フアックス一枚大作戦	隈部一雄（熊本日日新聞社編集委員）		27
●地方行政関係施設解説			
デジタルアーカイフによる地域振興について	総務省自治行政局自治政策課		32
地域産品・観光おこし研修会			35
●全国地域リーダー養成所			
ヨーロッパ研修報告	修了者研修会		36
●トピックス			
全国朝市サミット、函館で開催	北海道函館市・阿部貴樹		38
全国唯一の高層科学館「スペースパーク」がオープン	福島県郡山市・永戸法夫		39
●地域活けり団体探訪			
田舎倶楽部	北海道恵庭市		40
●地域を支える女性バフー			
あやおり夢を映かせる女性の会	岩手県遠野市		42
第15回地域イベント実務研修会			45
音楽でまちおこし	都道府県漫遊／手前みそですが		47・48
	地域だより／センター通信		46

表紙●談山神社の蹴鞠祭
(奈良県桜井市)

秋も深まった十月二十一日、奈良県桜井市の談山神社(川南勝宮司)で、伝統の「蹴鞠(けまり)祭」が行われた。

けまりは今から約千四百年前
中国から伝わった。昔は天皇、公



家から庶民まで各階各層の人が変
しんだ。

談に神社の祭りは、祭神である藤原鎌足公が法興寺(今の飛鳥寺)で中大兄皇子(後の天智天皇)とまりをけりながら大化改新の計画を練った、との故事による。

京都蹴鞠保存会の鞠足（まりをける人）が烏帽子、狩袴といった古風な装束でサッカーボール大の鹿皮製まりをはき、十五段の庭でまるを相手に与えるのがルールだ。祭り終了後は観光客も鞠足と一緒に遊べる。

●ペンリヤなぎ ●カメラリ小形又男



サイトウ・キネン・フェスタ＝長野県松本市
桐朋学園創設者の理念を実現しようと、その門下生が集まっての演奏会。子供音楽会も

音楽はわれわれ人間にとって生まれたときから切っても切れない関係にある。

赤ちゃんをなだめすかす子守唄、幼少時に口ずさんだ童歌、学校での音楽会、



音楽でまちおこし

心とませるコンサートなどさまざま。

自治体でもまちづくりに音楽を採り入れるケースが多い。

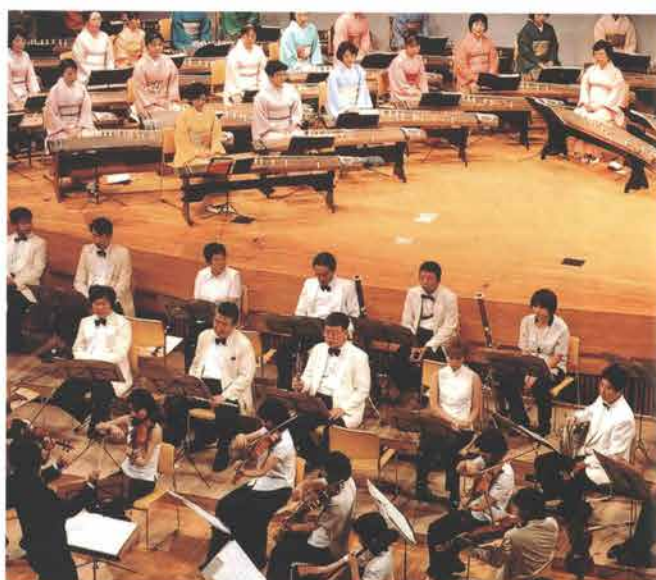
わがまちだけ、広域圏に及ぶ活動、はたまた国の内外に知られる演奏会などいろいろ。

そのメニューも多様だ。今回はそんな事例を紹介したい。



音楽施設＝香川県志度町

ギリシャ風の劇場テアトロンとランバルホールでは、ロックからクラシックまで幅広く演じられる



音楽文化振興計画＝愛知県岩倉市

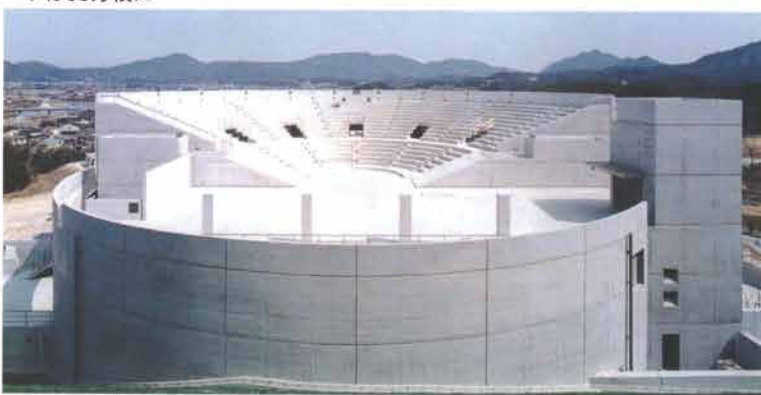
地元の愛知交響楽団に練習の場を提供したことで、さまざまな音楽文化活動が盛んに行われている



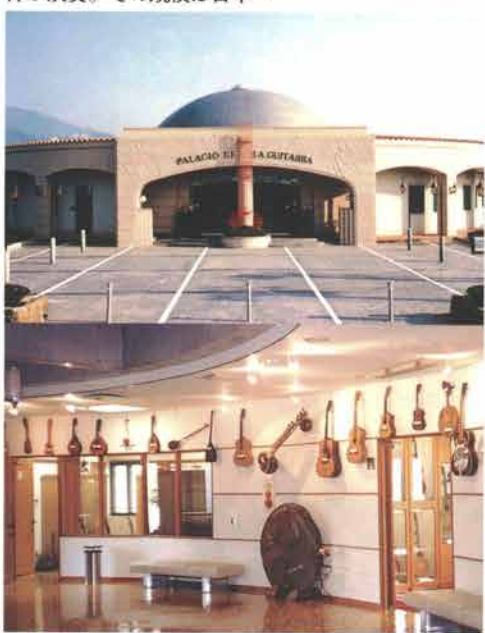
ストリート・ジャズ・フェスティバル＝仙台市
繁華街をステージに見立て590のアマ、プロ団
体が演奏。その規模は日本一



レ・コード館＝北海道新冠町
20世紀の音楽文化を後世に残そうと全国から寄贈してもらったレコ
ードは63万枚に



野外円形劇場＝山口県周東町
町にいつも音楽が響くように、と小高い丘にギリシャ風の施設パス
トラルホールを建設。中にはコンサートホールも



ギター文化館＝茨城県八郷町
世界的ギタリストとの縁で、各国のギターを集
めた展示室と演奏のできる施設を建設



ミュージックタウン＝神戸市長田区
阪神淡路大震災の復興で若者が集まるまちにしようと、長田発の音
楽発信に取り組む

有明讃歌＝有明広域市
町村園
海と大地のシンフォニー
「有明讃歌」を制作。その
発表会では総勢400人が
演奏、合唱した





巻頭エッセー



相川 宗一

さいたま市長

行政パラダイム・シフトへの対応

本年五月一日、埼玉県浦和市、大宮市、与野市の三市が合併し、新生さいたま市が誕生しました。百三万の人口を擁するさいたま市は、合併協議の当初より二年後の政令指定都市を目指すことを内外に表明し、新たな旅立ちをしてまいりました。

今世紀に入り、人口数十万の都市合併として、その意味するものは何かと考えたとき、私は、二十世紀の負の遺産といえる、行政の閉鎖性や、自主・自立の欠落などをできるだけ速やかに解消すべきではないかと考えております。

そのことは日本の地方自治を担う、各地の先進的な首長さんは気づき、対処されてきたことであります。その対策として、行政運営の中に市民参画や情報公開をいち早く取り入れ、実施されてこられたことは、マスコミなどを通して、国民の知るところであります。

私は、新生さいたま市の市長選挙において、今後の行政の指針としてこうした先進的な取り組みを活用させていただき、市民への公約として、行政への市民参画、情報公開、事務事業評価システムの導入、財政の予算主義から決算主義への変更など、冊子としてまとめ、市民の前に提示をいたしました。

そして、それらの提案は、あくまでも二十世紀から新世紀、つまり二十一世紀へのつなぎの行政手法ではないかという考えに至っております。

当然のこととして、時代の流れはその段階を経て、次の時代に即応できるものでもありません。

では、地方行政に関しての二十一世紀のパラダイム・シフト（理論的枠組みの変化）とは、どのようなものかと考えますと、一番大きな変化の要因として、日本経済のバブル崩壊に伴う財政難や地方分権による権限の移譲、そして少子高齢社会の到来という時代の大きな変化により、既存のパラダイムでは対応しきれない新たな時代が目前に迫りつつあるものと認識しております。

では、私たちがいまできる対応は何かと言いますと、まずは既存の制度の活用であり、その方法として、さいたま市は政令指定都市制度の活用を選択し、早期の移行を目指して課題に取り組んでおります。

さらにはその中で、どれだけの権限を区行政に与えられるかということも大きな試みであり、百万人を超える大都市の中で、地域の声を直接行政に反映させ、より市民に身近な行政運営をしていかなければならないと考えております。

今後、二十一世紀のパラダイム・シフトを見極め、そのうえで地方の時代と言われ、各自治体の行政運営をお互いに競い合う時代へと変化していくのではないかと考えております。

それはまさに、市民が住む場所を選択する時代でもあります。

音楽文化の基礎づくり、 スタート地点に アート・マネジメントの 人材育成を



桐朋学園大学
音楽学部教授
佐野光司

音楽家の生活基盤

十年ほど前だったろうか。まだバブルのはじける前だったが、東京から列車で二時間ほどのところにある中都市から、提言を求めるアンケートがきたことがあった。その都市で芸術家村をつくり、そこに音楽家が住むようにするにはどうしたらよいか、というものだ。私の答えは、今考えるとつれないものだった。以下に記しておこう。

「貴方の県に優れた音楽家が住むようにするためには次の条件が必要でしょう。」

- ①その音楽家に土地家屋を提供すること。
- ②あるいは音楽学校を設立すること。

（理由）現在、音楽活動（作曲や演奏）だけで生活できる音楽家は、超一流の世界的なレ



サイトウ・キネン・オーケストラ＝長野県松本市

ベルの音楽家だけです。多くの音楽家は、音楽学校に勤めるか、あるいは音楽を志す人への個人レッスンによって生計を立てていきます。したがって、貴県で音楽祭を開いたとしても、優れた音楽家は東京から日帰り、ないしは一、二泊で出張するだけでしょう」

以上が、その返答だった。前記の音楽家の生計の立て方は、ヨーロッパではそれぞれの地域にあった宮廷・貴族や教会における財力や権力が衰え、音楽家をお抱え楽師として雇うことが困難になって以来のことだ。その原因は産業革命にあったのだが、結果として音楽家は、十八世紀終わりのころから十九世紀初頭にかけて、「芸術家」として独立せざるを得なくなった。そのため、音楽家は聴衆や劇場の多い大都市に集中することとなる。その現象がなんと今日でも続いているのである。

ベートーベンですら、ウィーンでのピアノの演奏活動のほか、家庭教師や貴族の年金なしには十分な生計は立てられなかったし、シヨパンの主たる収入源はパリでのピアノの家庭教師である。彼らも今日なら作曲、演奏だけで生計が立ったかもしれない。しかし当時の都市の人口、ホールの数や演奏会の数では、まだ無理だったのである。

この現象は人口の増加や、劇場の増加した今日のほうが、まだ音楽家とその本来の活動だけで生活できる下地を持っていると言える。

「音楽でまちづくり」といったとき、どんな音楽で、どんなまちづくりをしたいのか、という問題が必ずおこるだろう。そのとき、もし一流の音楽家を招いて行う「音楽祭」であるなら、クラシックの場合、東京や大阪などの大都市からか、海外から音楽家を招くしかないだろう。それは前に述べたような音楽家の生活基盤の事情からである。

ホールの乱立

今日、地方で続いている音楽祭の多くは一九八〇年代以降から九〇年代初頭にかけて始まったものが多い。一九八〇年に「草津国際音楽アカデミー&フェスティバル」と「霧島国際音楽祭」講習会が同時に始まったころ、NHKで「地方の音楽祭」という名で特別に取材した番組があった。地方の音楽祭の多くがそれ以降に始まっている。それはちょうど

バブル経済が発展し始める時期であり、バブルがはじけた後に始まったものでは、記憶する限りでは、「別府アルゲリッチ音楽祭」や「宮崎国際室内楽音楽祭」などで、大分県の「ゆふいん音楽祭」のように一九七五年から続いているのはまれな例と言えよう。

地方で一九八〇年代以降になって、いくつかの音楽祭が開かれるようになった背景には、地方都市におけるホールの乱立がある。図表は一九六五年から二〇〇〇年までの「文化施設」の増加を示すグラフである。この図表だけでは厳密な数字は出ていないが大まかな推移は分かるだろう。

一九九〇年から九六年までのグラフの異常な上昇は、バブルがはじける前に計画したものが、その後建設されたことを示している。具体的な数字としては、かつて朝日新聞に載った記事によれば、「全国公立文化施設協会」

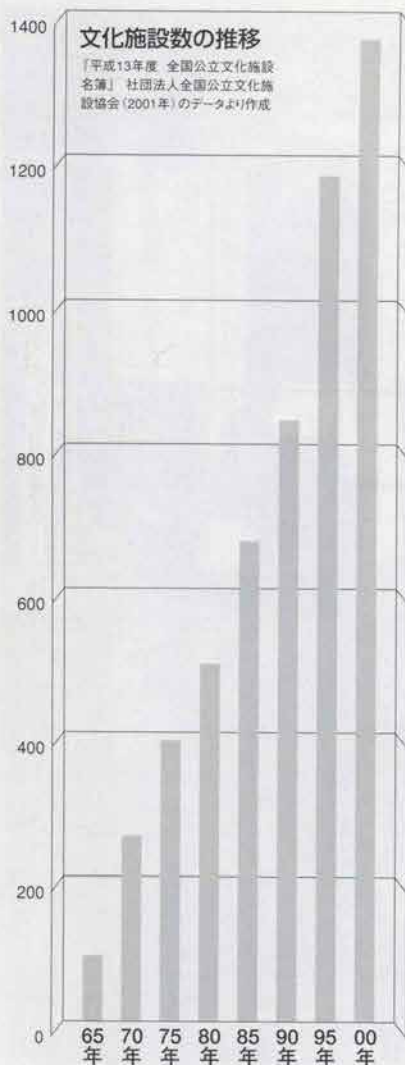
に所属する施設は一九八六年に六百八十であったものが、一九九六年には千八百八十二に増加し、十年の間に五百二十もの施設・ホールが建設されているのである。

これは同協会に所属するものだけである。協会に属さない民間のホールを加え、また建物に複数を所有する場合の各ホールを計上すると、その数は二千とも三千とも言われる。対人口比で考えたとき、これほどの文化施設を所有する国は、世界的にみてもけうな現象と言える。

しかし、問題なのは、こうした施設の多くが貸しホールの形で存在しており、そこで開く催しものを企画・運営するアート・マネジメントの人材を配置していないことだ。

茨城県の水戸芸術会館がオープンしたとき、館長・芸術監督に吉田秀和氏を迎えたため、単に建物を造っただけでなく、その内容を優先的に考えている、とソフトを先行させたホールづくりの意義が、当時の新聞に大きく報じられたことがあった。埼玉県与野市（現さいたま市）の彩の国埼玉芸術会館も諸井誠氏を芸術監督として迎えているが、このようにホールの内容を優先的にしている例は、実は日本ではほんの一握りにすぎない。

今日、「音楽でまちづくり」は、このホールのソフト不足を補うかのような形になればよいが、多くは「若者の流出」を防ぐか、





「町の活性化」が目的である。しかしもしその根底に、音楽文化育成への認識があるとするならば、当初はそれでもよいのではないかと考えている。

地方の音楽祭の意味と問題点

では地方で音楽祭を開く意味はどこにあるのだろうか。私は第一に「生の音楽」を聴く機会を提供することを挙げておきたい。私自身の経験で恐縮だが、東京に出るまで、音楽は自宅にあった昔のSPレコードやLPレコードでしか聴いたことがなかった。だから初めて生のオーケストラでベートーベン、チャイコフスキーらのいわゆるポピュラー名曲を

聴いたときの衝撃は大きかった。オーケストラの各楽器が、オーボエが、クラリネットが、弦楽器が、あんなにきれいな音を出すという経験。太鼓やコントラバスの深い低音の迫力。それは未知の、初めての体験だった。さらに言えば、これらの響きは、今でも家庭のオーディオ装置によるスピーカーで出せるものではない。

地方のオーケストラが、中学、高校でやる巡回演奏会は、その意味では非常に大きな意味を持つものだと思う。だが同時に地方で行う音楽祭、あるいは「音楽でまちづくり」には注意しなければならない問題点が多い。

第一に、音楽祭を開くためには、「音楽文化を育てる」という目的意識をしつかり持つことが基本であろう。その当初の動機が「若者の流出」を防ぐものであろうと、「過疎化に対する町の活性化」であろうと、その根底に「音楽文化を育てる」という意識がない限り、成功はしないだろう。そうでなければ対象が音楽である必然性がない。

第二に、長い目で見ることである。何年と具体的に示すことはだれにも不可能だろうが、十年二十年という短い単位で一つの文化が根付くということはあり得ない。それは明治以来の日本の文化を考えれば、だれにも容

易に想像がつくだろう。より長いスパンを視野において、よい音楽を提供するという前提を常に持っていないと、実利目的のみでは育たない。まちおこしの手段としてのみ音楽を利用するだけでは、直接利益がなければやめる、という図式につながりやすい。それは資金の助成団体や地方自治体の財源の問題と密接な関係があるが、利益を求めては、文化は決して育たないのである。文化とは無償の行為が醸し出す香りのようなものだ。それが美酒に発酵すれば利益の還元にもなるのか。

第三の点はアート・マネジメントの問題である。音楽祭とはその企画の在り方が中心であり、地方の音楽祭には、しばしば客の集まる名曲ばかりを無計画にのせて「啓蒙」という意識が欠けている場合が少なくない。たとえば日本の現代音楽は、今や世界のトップクラスの水準にある。だが地方にはそのことの啓蒙があまりに少なく、また世界水準の作曲家があまりに知られていない。

さて今日の地方の音楽祭には、大きく分けると三つのタイプになるだろう。

リゾート地音楽祭（草津、軽井沢、秋吉台、霧島など）は、リゾート地で演奏会や音楽会の講習会を開く形態である。

地方型音楽祭（仙台、栃木、ゆふいんなど）は、地方都市で集中的に演奏会を行う型である。ここにはストリート音楽会も含まれる。

アーティスト主体音楽祭（P.M.F. パシフィック・ミュージック・フェスティバル、サイトウキネン、別府アルゲリッチなど）は、アーティスト中心で、客を呼べるアーティストによって成り立つものである。

これらはそれぞれに特色があるが、「地方型」以外のものは、多くの場合、東京など中央都市で企画をし、運営を地方自治体が行っている場合が多い。当初はそれしかないとも言えよう。先に述べたように、日本ではアート・マネジメントの人材が決定的に不足しているのが現状であるからだ。だが、地方でやる限り、アート・マネジメントを次第に地方の各地で行う方向に持っていかなければ、その地域の特色はなかなか出ない。その形態を続けるかぎり、いつまで経っても、結局は東京など、中央文化を缶詰にして地方に持つていくに過ぎないことになる。

また「アーティスト主体型」の場合、アーティストに良い人材を得られなくなったとき、その後どうするか、というきわどさを常に持っている。実際に、東京のアート・マネジメントと地方の財政との折り合いがつかず、東京の企画が降りたとたんに内容が貧困になった音楽祭の例も少なくないのである。地方のアート・マネジメントが育っていないために起こった現象の好例である。それは同時に「地方型音楽祭」の企画がどこまで続く

か、そして「啓蒙」よりは集客力のある音楽の羅列、というきわどさと隣り合わせになっていることも関連していう。

最後に「マンネリ化」という批判を恐れるな、と言っておきたい。そうならない努力は常に必要なが、概して企画・運営の経験のない専門家から、そうした批判が出るが多い。一つのコンセプトを決めたら、反省を忘



ストリートジャズフェスティバル＝仙台市

れてはいけませんが、推し進める勇気と努力が何よりも重要なのである。

なぜ地方か

では「音楽でまちづくり」の意義はどこにあるのだろうか。司馬遼太郎氏の定義によれば、文明とは機械のように他の場所に移しても作動可能なものだが、文化とは、本来その土地に根差したもので容易に移植できるものではない、という。実際、芸術・文化とは、草木のように、その土地の土壌・風土と深く結びついている。

さらに言えば抽象的な「日本」は存在しないのである。東京も一つの地方であり、各県、市町村も一つの地方である。日本とはそれぞれの地域の集合体であり、各地域の文化の活性化が、トータルで日本文化を生む。したがって、東京など中央の地域のみが突出している状況は、まだまだ発展途上国型の文化形態なのである。

逆に言えば、明治以来ようやく突出した地域ができるまで、日本文化は成長したのだが、それを支える底辺の広がりはまだない、というのが現状だろう。今日、各地方でようやく音楽祭が広がったことにより、音楽文化の基礎づくりが、ようやくそのスタート地点に立ったところだと言えるのではないだろうか。

20世紀の文化残すレコード館建設 全国の音楽愛好家63万枚寄贈



新冠町レコード課長
中村修二



小さな町だ。

新冠町は北海道の日高地方、苦小牧市とえりも岬のほぼ中間に位置し、人口六千三百人ほどの

日高地方は全国の競走馬の約八割を生産する日本有数の馬産地で、新冠町の第一次産業の中心も軽種馬生産。怪物と呼ばれたハイセイコーや三冠馬として名を残すナリタブライアンなど、多くの優秀馬を送り出している。

心の再生を目指す

新冠町は「レ・コードと音楽によるまちづくり」で全国の皆さんに注目されている。私たちはあえて、事業名や組織名に「レ・コード」という表現を使っている。「レ・コード」はリターン (RETURN) の「レ」で「再生」を、「コード (CORD)」はラテン語で「心」を表し、「心の再生」、「心の回復」を意味する。

この事業を始める前は、軽種馬生産以外には際立った産業もなく、過疎化に悩んでいた。「町を生き生きと輝かせたい」そんな思いから各自治体は懸命にまちづくりに取り組んでいる。まちづくりには二つの方法があると思う。一つは自然や産業、歴史や人材といった郷土にある資源を活用するやり方。もう一つは、郷土とは関係のない素材を持ち込んで、まちづくりに活用しようという取り組みである。新冠町はレコードというなんのつながりもないものを素材に選んだ。

音楽愛好者の発想

平成元年、現町長が誕生し、新たなまちづくりの模索が始まった。音楽業界では昭和五十年代全盛期を迎えたレコード生産が下火となり、新譜はほとんどがCD化され、レコードの生産中止がささやかれ始めた。

このころ、町内で音楽愛好者の集まり「一枚のレコード」が活動をしていた。レコードの生産が打ち切られCDが主流となれば二十

世紀の音楽文化の記録であるレコードが散逸し、消滅してしまうのではないかと懸念。歴史的に価値のあるレコードを世界中から新冠町に集めることができれば、文化の香り高いまちづくりができるのではないかと、話し合った。

この構想が、職員の政策提案の一つとして町長に提出され、現実化されていくことになった。幸いにも平成三年度の国土庁「過疎地域活性化推進モデル事業」に指定され、「レ・コードと音楽によるまちづくり事業」の第一歩が始まった。同年プロジェクトチームを職員十五人で立ち上げ、事業展開の検討を開始、同時にレコードの収集やフォーラムの開催、コンサート活動を展開することになった。レコードの収集も一年間で三百二十人から五万枚の寄贈があり、予想外の反応に自信を深めることができた。

四年度に企画課に専任職員一人を置き「レ・コードと音楽によるまちづくり事業推進室」を設置。事業の中核施設となるレ・コ

レコード館建設計画の策定や、レコードの保管とデータベース作成、そして町民に理解してもらうためのコンサート、各種イベント、説明会を開いた。しかし町民の反応はさまざまだった。テレビや新聞がユニークなまちづくり事業として、たびたび取り上げてくれたこともあって、高い評価をしてくれる町民、逆に「収集はレコード会社の仕事」「レコード館建設より一次産業振興に資金を投入すべきだ」「レコードで飯が食えるのか」といった意見さえ出た。

賛否両論が渦巻く中、七年度にはレコード館建設工事に着手、八年度には「レコード推進室」を「レコード館開館準備室」に改称、九年には「レコード振興課」を新設し六月八日、待望のレコード館がオープンした。総事業費は約二十五億円。町内の音楽愛好者の発案が町を動かして八年目、大きな夢に向けて第一歩を踏み出した。

町のシンボル

レコード館はレコードに関する施設と、住民活動に関する施設、そしてコンサートホールを併せ持つ複合施設で生涯学習施設として建設。開館以来、年間、約十万人が利用している。内訳は町民と町外の人が半々だ。通過型観光地でしかなかった新冠町もレコード館の開館以降は滞留型観光客が増え、町に

も自然と活気が感じられるようになってきた。そして全国の音楽愛好家から寄贈されたレコードは現在、約六十三万枚に上っている。また、利用しづらい施設と思いがちだった町民にも自分たちの施設なのだと認識してもらうことができた。

新冠町は過疎の町だ。人口の流出だけが過疎ではない。文化的過疎というものもある。人口の減少という過疎と文化的過疎が町民一人ひとりの内面にまで及び、町から活気が消えてしまう「心の過疎化」はなんとしても避けなければならぬ。

レコード館のこけら落としには町民主体のミュージカルを公演、大盛況だった。この余韻は翌年度、市民劇団「ど・こーれ」の結成と、すべて町民手づくりのミュージカル「ヒタカリアン伝説」の公演へと続いた。結成四年目の本年も、十二月の公演を目指して連日、練習に励んでいる。

元気な過疎の町に

町民ホールの運営は町民の手で、という思いから自主企画実行委員会が結成された。コンサートの企画から公演まですべてボランティアの実行委員が実施している。今までテレビでしか見ることができなかったアーティストを町民ホールで見ることができるようになった。

文化や芸術に接する機会が格段に増えるとともに、住民の自主的な活動も確実に活発になってきているように感じられる。レコードの収集から始まり、地域文化の振興に取り組んだ音楽のまちづくり事業は「心の過疎化」を防ぎ、結果として元気な過疎の町をつくり上げたと思う。

開館して五年目を迎えようとする今、町外

から多くのお客さんが訪れてくれる施設、住民活動にとても欠かすことのできない施設として、町民の気持ちの中にしっかりと根付き

始めているようにも思える。

レコードを集めることだけを目標としたまちづくりではなく、レコードや音楽を通じて、私たちが忘れ去ってしまった大切な心を思い出そう、そして「人びとの思い出や心」を新冠に集めようとするまちづくりである。

まだまだ課題は多いが、「元気な過疎の町」を目指して今後も活動を続けていこうと思う。



レコード館のこけら落としの町民ミュージカル



日本最大のストリートジャズフェスティバル 街角が楽しくなる音楽のまち目指す



仙台市観光交流課 主事
根本 茂

仙台市は、人口百万人を擁する東北最大の都市である。独眼流の異名をとった戦国武将・伊達政宗公がこの地に開府（まち開き）をしてから、今年でちょうど四百年目を数え記念すべき年である。秋の訪れを感じるころ、杜の都・仙台のシンボルとなっているケヤキ並木に心地よい風とともに流れてくるのは、音楽、歓声そして拍手だ。

街全体がステージ

さる九月八、九の二日間、第十一回定禅寺ストリートジャズフェスティバルが開催された。このフェスティバルは、定禅寺通を中心とした繁華街全体をステージに見立てて開かれる。ビル入口などの公開空地、グリーンベルト、公園、市民広場が参加グループにとってのメインステージとなる。

演奏される音楽は、ジャズに限らずロック、ポップス、ソウル、ワールドミュージックなど、あらゆるジャンルにわたり、さまざまなか嗜好を持つすべての聴衆を魅了し、楽しませ

る。名称に「ジャズ」とあるため、初めての方は、ジャズに限った演奏かと思われるようだが、実際各会場で演奏されている曲を聞いて回ると、そのジャンルの多さには驚かされる。

定禅寺ストリートジャズフェスティバル実行委員会によると、十九世紀末、アメリカ南部ニューオーリンズの街角で新しい音楽としてジャズが生まれたが、当フェスティバルも、その自由の精神と表現を受け継ぎ、「街角が楽しくなる音楽」を目指しているのだという。

従来、仙台の観光の目玉として、五月半ばに行われる「青葉まつり」、八月上旬の「七夕まつり」、そして十二月半ばから年末にかけて、ケヤキ並木をイルミネーションが彩る「光のページェント」、これらを仙台・三大まつりと称してきた。

このまつりに続く文化的イベントを創りたいと、定禅寺通界隈の有志が集まり模索していた。たまたま「光のページェント」期間中にシンセサイザーの演奏会を定禅寺通の一角で行ったところ、多数の観客が集まり大好評

を博した。その後、地元のミュージシャンたちから、なんとか街頭で演奏できないものかと相談を受け、開催にこぎつけたというのがこのフェスティバルの始まりだった。

参加グループ590に

平成三年からスタートした同フェスティバルは第一回目の参加グループ数二十五、ステージ数九カ所、観客数約五千人という規模であったが、今年は参加グループ数五百九十、ステージ数は二日間で延べ七十三、観客数約四十五万人と、一つのフェスティバルに参加するグループ数としては日本最大級であり、世界でも有数の音楽の祭典に成長した。

これだけのフェスティバルを陰で支えているのは、市民ボランティアによる実行委員会である。メンバー構成は、下は高校生から上は五十代の社会人までと幅広く、フェスティ



定禅寺通グリーンベルトのステージ

バルを成功させるために、年間を通して準備に取り組んでいる。まさに市民の手づくりイベントと言える。

こうしたイベントは、その規模が大きくなるほど難しいのが運営資金と中心となる実行委員メンバーの確保だ。

資金の調達方法として、同実行委員会では、「サポーターズクラブ会員」という個人会員をホームページなどで募集し、年会費（協力費）を集めている（特典としてイベントの案内や関連ライブの割引、Tシャツ進呈などがある）ほか、プログラムの広告収入、企業協賛金、オリジナルTシャツやミニガンザ（フィルムケースを利用した手づくりのオリジナル楽器）・ステッカーの販売など、資金を得る努力をしている。

市民創造型のイベント

市の支援としては、当初は市民の芸術文化活動との位置付けで、当市の芸術文化関連財団である市民文化事業団の制度を使用しての助成にとどまっていた。しかし、規模が急速に拡大し、さらに昨年は第十回記念ということで、バンド数も増えた。それまでの日曜日一日限りの開催では収まりきれず、土・日曜の二日間開催とした。これが実績となり、今年度から、芸術文化活動にとどまらない「市民創造型のイベント」との位置付けになり、

所管を経済局に移し、直接市から補助することができるようになった。

補助金による支援以外に、行政としてとくに企画運営面に口を出すことはせず、あくまでも実行委員会主体で運営している。このことが、それぞれの意欲にもつながり、参加者にも、観客にも楽しさとなって伝わり、広がりを持つてきたのではないかと考えている。私の周辺にも、参加者としてかかわっている職員がかなりおり、フェスティバル当日、会場の街角で、思いがけない人のパフォーマンスを目の当たりにすることができるようにも楽しみの一つである。

また、実行委員会のメンバー確保についてはホームページなどで通年受け付けているが、中心となるメンバーを確保するのは、なかなか難しいようである。

昨年度同フェスティバルは、街をステージとした音楽と人びとの触れ合いが、景観上優れているとの評価を得て、仙台市の「都市景観大賞」を受賞している。これは、当フェスティバルがすでに仙台という街並みの一部として、自然に溶け込んでいることの証ではないかと思う。図らずも市民の手で、音楽によるまちづくりが成功した良い例といえるだろう。

国際音楽コンクール

仙台におけるもう一つの音楽の祭典「仙台

国際音楽コンクール」が、今年五月十二日から六月九日にかけて開催された。これは世界各国から才能ある若い音楽家たちが集い、世界の音楽文化の振興と国際的文化交流の推進に寄与することを目的としており、今年が第一回目。バイオリンとピアノの二部門で、三十九カ国から三百人もの出場申し込みがあり、世界四都市において行われたオーディションの合格者が仙台でのコンクールで競い合った。真摯に音楽に打ち込む演奏者の姿とその高い音楽性・技術の数々に、市民をはじめとする聴衆は、大変な感動を覚えたと思う。



サタデーナイトジャムを終えて乾杯

杜の都・仙台は、大学やその研究機関が多く所在することから、「学都」とも称される。市民自らがはぐくんだ「街角が楽しくなる音楽」と行政が市民の協力を得て、世界に発信する「国際的に高いレベルの音楽」、これらにより仙台が、「音楽の都」＝「楽都・仙台」と称されるようになったら、かなり魅力的だと感じている。

仙台にお越しの際は、ぜひ「街角で楽しくなる音楽」を感じていただければ幸いである。

世界各地のギターを集めた文化館 人びとの感性をつなぐきずな



八郷町商工観光課主幹
久保田克己

八郷町は、首都圏からわずか七十^{キロ}に位置しながら、筑波山をはじめとする山々に囲まれ、水郷筑波国定公園に指定された、緑豊かな自然環境を有している。

この恵まれた自然や田園風景から生み出される「やすらぎ」をキーワードに、ふれあい・助け合い・話し合いのある地域コミュニティの構築を図り、活力に満ちた八郷町の創出に取り組んでいる。

例を挙げると、茨城県の花、バラをメインに、四季折々の花が楽しめるフラワーパーク、地元産の豊富な種類の果物を、自分の手で取って味わえる観光農園などである。これらはすべて、普段着のままで出掛けることができ、そこから生まれる「ふれあいの和」と「リフレッシュ」された英気が地域づくりの契機となることを目指している。

文化の発信を目指して

ギターは、だれにでも親しめる大衆性を持つており、広く世界に普及している。また、

「世界中の人びとの感性をつなぐきずな」との視点でギター文化館を建設した。八郷からギターの文化を発信しながら、地域との共存を図り、新たなコミュニティ創造の場を形成しようという狙いも込めた民主導の施設である。

文化館の建設に大きな役割を果たしたのは館長の細川鋼一氏。

細川氏は、趣味でギターを始めた。たまたまギターの収集家で世界的なギタリストの故マヌエル・カーノ氏と出会った。これが縁で収集していたギターを譲り受けた。スペイン生まれのカーノ氏は数回来日して公演した親戚家で、スペインと日本の音楽による文化交流を切望していた。「ギターは飾るものではなく、弾かれなければ意味がない」を口グセにするカーノ氏の言葉に感銘した細川氏は、ギター文化館建設へと心を動かされた。

その後、音楽鑑賞団体である東京労音の出資で平成四年十一月に文化館がオープンした。総工費は約五億円。

スペインに似た光景

ここで疑問に思うのは、なぜ「八郷のこの地に」ということだ。

細川館長らが候補地の一つであった八郷の小高い丘に立ったとき、「おおつ」と思わず声を上げた。東京からわずか一時問あまりのところに、日本のとっておきの美しさに出会えたことと、ここからの風景がギターの本場・スペインの南部アルハンブラやグラナダのまちにそっくりだったからとのこと。そして一同「こしかない」と即決した。

文化館はギターの口輪響孔（サウンドホール）の形をしており、通路から玄関は指板を模してギターそのものを表している。館内に入ると木製のドームが、来館者を温かく迎えてくれる。現在は土・日曜日のみの開館で音響効果を誇るホールではミニコンサートが開かれる。その奏でる音色は温かく、





館内ロビー。左側は「世界のギター展分布図」

心の奥底まで届くようだ。それは、館長自慢のドーム状の天井による。

「すぐれたギターほど美しいものはほかに考えられない」(シヨパン)、「ギターは小さなオーケストラである」(ペルリオーズ)などギター礼讃の言葉が伝えられている。ギターは、静謐から熱情まで雄弁に物語る楽器と言えるのではないだろうか。

ボランティア活動

文化館は、運営がボランティアである館長に一任され、さらにその行動に共感した地元の人びとによる同じボランティアたちが支えている。

細川館長は奈良県吉野で林業を営んでいる。週末に大阪の自宅から八郷へ来て大阪まで戻るといふ生活。もちろんすべて自費。

その様子を見るに見かねて、地元のギター愛好家たちが集まり、自然発生的に「ギターを愛する会」が誕生した。この会は、文化館とは別個の独立したボランティア組織として活動し、文化館の運営を助けている。またコンサートも行っている。

メンバーは公務員、銀行マン、教師、広告業に携わる人とさまざま。この会のサポートに対し「メンバーたちは、不思議なコミュニティでつながっている。それぞれがお互いに干渉しないところで、無理をせず

まく仕事をしてくれている。ポスターを描いてくれる人、駐車場で誘導をしてくれる人、受付の人、会計の人という具合に」と細川館長。「愛する会」のメンバーは地域の文化向上のため、小中学生の体験授業や講演会などにも積極的に取り組んでいる。

着実に形成される文化

また、文化館にはクラシックギター、フラメンコギターはもちろん、フォークギター、パンジョー、マンドリン、ペルーのチャランゴ、ブラジルのカバキニョ、インドのシタール、三味線など世界のギターの仲間が展示されている。

さらにギターの歴史を一望できる銘器展示室には、十八世紀から現在、活躍中の名工の作品が飾ってある。

文化館が人をつくり、人がホールを育てていく。館の名称どおり、ギターを介した「文化」が着実に形成されつつある。

今、八郷町には、美しい自然にひかれ、陶芸、彫金、ガラス細工、ステンドグラス、染物、画家といった多くの文化人が移り住んでいる。言い換えれば、さまざまなジャンルの人的資源が集積されつつある。この人たちをうまくネットワークすることで、文化村構想といったまちづくりも可能になるのではないだろうか。

世界に発信するサイトウ・キネン・フェスタ 陰の立て役者はボランティア



松本市収入役
坪田明男

スズキ・メソッド発祥の地

松本は明治初年の開智学校（国の重要文化財）、大正年間における旧制松本高等学校の両校開設を背景に古くから学問、教育文化を尊ぶ気風が強い。また、アルプスの玄関口として山岳観光のメッカでもあり、さらに、幼児の音楽教育で著名な「スズキ・メソッド才能教育」発祥の地でもある。こうした「学、岳、楽」三つのガクを地域振興の核として「ガク都都市の形成」に取り組んできた。

「楽都」を語る場合、先述の「スズキ・メソッド」を欠かすことはできない。この主宰者である故鈴木鎮一氏は、子供の音楽教育を生涯の仕事とし、国際的にも著名な幾多の音楽家を輩出する一方、音楽活動の中で展開されるさまざまな交流を通じ、広く市民の間に音楽に親しむ感性を培うなど、地元松本の音楽教育にも大きな役割を果たしてきた。

昭和五十七年、音楽愛好者の長年の念願であった音楽文化ホール（サ・ハーモニーホー

ル）がオープンし、松本交響楽団や松本フィルハーモニー、松本室内合奏団はじめコーラスグループなどアマチュア音楽家の活動拠点が、また、国際レベルの音楽鑑賞の殿堂が整った。これを契機として、同六十年「音楽都市宣言」をし、「楽都」のまちづくりに向けて一歩踏み出した。その後、クラシック音楽の鑑賞の機会も増え、アマチュア音楽の活動も一層盛んにはなったが、音楽が地域振興のインパクトにいうところまでにはいかなかった。

評価された松本のまちづくり

ところが平成三年、まさに降ってわいたように世界的な指揮者・小澤征爾氏から「松本を本拠地として長年の夢である世界水準の西洋音楽を世界に向けて発信したい」という提案が県知事と松本市長に持ち込まれた。その音楽活動の中核はサイトウ・キネン・オーケストラ（SKO）という構想に関係者は夢ではないかと、耳を疑った。

小澤氏は、「日本には西洋音楽の伝統というものはないが、音楽の基礎を習得し本場西洋で経験を踏めば、必ず西洋人に負けない音楽家になれる」という故斎藤秀雄教授（桐朋学園創設者の一人で、小澤氏の恩師）の理念を実現するためには、日本の特定の地方都市をホームステージとして、世界に向けてSKOによる本格的な音楽を発信したいと構想を練っていた。

これを実現する本拠地の条件としては、かつて斎藤先生の指導のもとで厳しい夏季合宿をした軽井沢のような自然環境の良い地方都市で、良いホールがあることに加えて、音楽が盛んな土地柄であり、「日本を代表するにふさわしい都市」が望ましいと考えていた。

松本はこうしたハード、ソフトにわたる都市機能を十分に備えているとして、同年十一月に正式に「サイトウ・キネン・フェスティバル（SKF）」が、将来にわたり松本で開催されることが決まった。これは、天恵の自然環境を大切にしながら、コッコツと築き上

げてきた「松本のまちづくり」が評価された瞬間であり、このビッグニュースに松本市民はもちろん、全国のクラシックファンが歓喜の声を上げた。

演目はすべてオリジナル作品

同四年八月に開幕したSKFは、今年で十回目を数えた。オーケストラ、オペラ、室内楽からなるこの音楽祭は、すべての演目が松本で制作され、練習を重ね初演されることに大きな特徴がある。毎回、オリジナル作品を世界に向けて発信し続け、音楽祭の様子は報道を通じ海外にも伝えられ、質の高い洗練された音楽祭として評価されている。

SKFの総監督を務める小澤氏は、この音楽祭を通じて子供の音楽教育に情熱を傾けている。その一つは「子供のための音楽会」で、毎回一万四千人に及ぶ県下の小学生が、SKOの生演奏を鑑賞する機会に恵まれている。また、選ばれた地元の小中学生がオペラの舞台に登場するなど、エキサイティングな試みをはじめ、地元の学生やアマチュアを対象にクリニック（教室）を開催するなど、回を重ねるにつれ、演奏家と地元との一体感が培われてきた。

音楽祭を陰で支えてきたボランティアも特筆される。開幕当初から、SKF松本ボランティア協会が組織され、その会員数は四百人

に及ぶ。チケット発売や会場運営はもちろん、長期にわたる音楽関係者の滞在がアットホームになるよう、さまざまな支援・交流が行われており、フェスティバルの一方の立て役者でもある。

今後の展望

十年の歳月を経て、課題は何か。運営組織は市が常設課を設け、音楽祭の時期には県や民間スタッフが参画する実行委員会を構成している。私は初代の国際音楽祭推進室長を務めたが当初は戸惑いもあった。年々ノウハウを蓄積しスムーズに運営されているが、徐々に民間にシフトし、一層市民が支える音楽祭への道のりを議論する時期ではないかと考える。

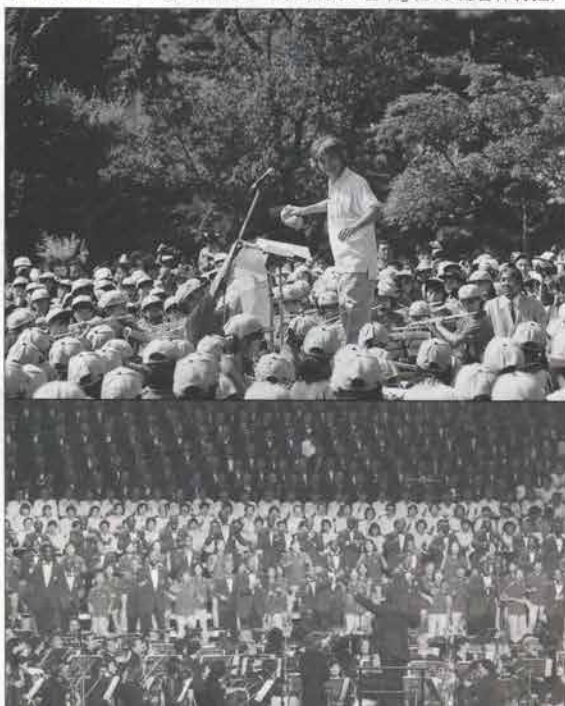
資金面では市一億三千万円、県が一億円、企業メセナなどによって毎年四億～六億円規模の財源を賄っているが、経済不況の中で民間からの財源調達も限界が見える。世界の音楽文化を担う立場に立って、引き続き一定の行政支援は不可欠である。

音楽のまち、「楽都」への展望はどうか。そもそも「音楽都市」とはどのような都市を言うのだろうか。音楽祭を地域おこしのインパクトとしている都市は少なくない。観光誘客を狙いとするもの、音楽技術の向上を目的とした研究発表型のもの、さらに海外では、

作曲家の生誕地やゆかりの地で、これを顕彰することからスタートしたものなど性格、内容はさまざまだが、単に音楽祭のホーム・タウンを担うだけではない。

SKFをきっかけに、市民の音楽に対する関心が一層高まり、また、小中学校の吹奏楽は全国のトップレベルになった。こうした波

(上) サイトウ・キネン 歓迎パレード合同演奏会(松本城庭園)
(下) ふれあいオーケストラコンサート「100人の合唱」(松本総合体育館)



及効果を大切にしながら、市民オペラや少年少女合唱団の育成など、市民自らが手づくりの舞台に立つことによって音楽愛好者の底辺を拡大したい。音楽は民族、信条、人種を超えて人びとを一つに結びつける。市民の間に音楽を愛する感性を養うこと、そのものこそが「音楽都市」への早道かもしれない。

愛知交響楽団を中心にまちづくり 市民・音楽家・行政が協働で

愛知県尾張北部に位置する岩倉市は、古くから交通の要衝として栄え、戦国武将・山内一豊や岩倉織田家の名残を今に伝え、また、春の桜まつり、夏の山車まつりでは三台の山車が旧街道を練り歩くなど、歴史の香り高いまちである。市の中心部を流れる五条川は、県内屈指の桜の名所として知られ、兩岸を埋め尽くす桜並木は、「日本のさくら名所百選」にも選ばれている。

市域は県内でもっとも狭い一〇・四九平方キロ、その中で約四万八千人の人口を抱えた名古屋近郊の住宅都市という特徴を持つ本市のまちづくりは、快適な生活環境の形成にある。「豊かな心と協働による成熟した市民社会をめざす」を第三次総合計画の基本理念に掲げ、その実現に向けて音楽文化の振興、自然環境の保全や創造、都市基盤整備などさまざまな施策を実施している。

今は物中心から、やすらぎ、いきがい、ゆとり、個性といった心を大切にした生活が求められる時代になっている。本市では、市民

が住んでいてよかった、住み続けたいと思うような誇りと夢のもてる、「安全・安心、心豊かなふれあいの市政」をキャッチフレーズに新しい都市文化の創造として「音楽のあるまちづくり」を市民と協働で進めている。

まちの財産

平成元年度、練習場を探していた名古屋のプロオーケストラ「セントラル愛知交響楽団」(当時はナゴヤシティ管弦楽団)に市の施設を練習場として無償提供する話が持ち上がった。これを契機に翌年度から同交響楽団を中心として小中学校音楽鑑賞会、地区サロコンサートなど数々の施策を展開することとなり、市民・音楽家・行政の協働による、市民が主役の「音楽のあるまちづくり」がスタートした。

また、この取り組みが、十年度に文化庁「文化のまちづくり事業」に選定された(十三年度から日本芸術文化振興会の地域芸術文化活性化事業「文化のまちづくり事業」に変更)。



岩倉市生涯学習課係長
今枝幹夫

現在、同交響楽団の音楽活動はまちの財産になっている。これまでの音楽にかかわる本市の主な取り組みを事業名のみ紹介すると、行政による取り組みとして、市民音楽祭



「中学校音楽鑑賞事業」生徒の代表が指揮者に挑戦

(九年度から運営を岩倉市音楽連盟に委託)、生涯学習講座(民族音楽レクチャーコンサートなど)、市役所ロビーコンサート、市民コンサート、市民芸術劇場、音楽療法、シンボ



市民ミュージカル「不思議の国のアリス」

ルード「音のアート」整備事業などを行っている。

委託事業

セントラル愛知交響楽団への委託事業としては市内小中学校の音楽鑑賞会、各種コンサート（ポップスコンサート、市役所ロビーコンサート、地区サロンコンサート、岩倉駅コンサート、市民交流コンサートなど）、友好都市福井県和泉村での文化交流音楽鑑賞会、小中学校の音楽クラブ、市民吹奏楽団の指導などを実施している。なお、委託事業ではないが、市民ミュージカルや岩倉第九演奏会、いわくら新世紀をうたう会の演奏など地域の

音楽作品づくりに協力している。楽団員有志による保育園演奏訪問などの活動も行っている。

市民による音楽文化活動では、岩倉市音楽連盟、いわくら少年少女合唱団、岩倉第九演奏会などの実行委員会、五条川野外音楽フェスティバルなどがある。市はこれらの活動に対してまちづくり文化振興事業助成金の形で支援している。

ジュニアオーケストラ

市民と行政が協働して政策課題を研究する「行政の文化化研究会」で、ジュニアオーケストラの設立が提言された。これを受け専門家と市民を交えた「音楽のあるまちづくり研究委員会」で検討を重ね、準備段階として9年度にジュニアオーケストラクラスを設立した。

以後、練習を重ね十二月十六日に発足式と第一回定期演奏会を開催し、ジュニアオーケストラとして正式にスタートする予定だ。同オーケストラの特徴は、楽器が弾ける子供たちだけでなく、セントラル愛知交響楽団というプロのオーケストラを指導陣に迎え、初心者でも意欲のある子供たちを受け入れ、指導する育成型という方式をとっていることだ。現在、単科クラスには小学校三年から中学校三年までの初心者三十三人。合奏クラスは小学校四年から高校二年までの経験者四十五人の計七十八人が練習に励んでいる。

音楽文化振興基本計画

本市は、さまざまな事業を展開して「音楽のあるまちづくり」の実現に努めてきた。市民や音楽家とともに一つひとつの事業に取り組んできた結果、音楽が地域に少しずつ定着するなど、その効果が徐々に広がっている。音楽文化が一層、豊かな地域づくりに役立つようにするため、総合的な視点からもう一度、音楽との関係を見つめ直そうと9年度に音楽文化振興計画を策定した。この中で音楽文化を「創作、演奏、鑑賞など多面的な音楽活動を通じて蓄積、形成された文化」と定義し、「音楽のあるまちづくり」の目標を定め、体系的かつ戦略的に施策を進める際の指針にしようというもので、目標年次はおおむね十年先を想定している。

目下、地域の芸術団体、芸術系大学、音楽家と協力した推進体制や専用ホールなど音楽活動施設の整備などを検討している。

文化が根付くには多くの時間が必要である。地域に音楽という文化が十分に伝播されるような創造的な活動が大切であり、本市では生涯音楽学習の振興をまちづくりの視点で取り組んでいる。とくに次代を担う子供たちの育成、人づくりは、時間はかかるとしても結果的に、まちづくりに厚みと広がりを持たせることにひろがっていくと考えている。

ストリートミュージックで震災復興 若者が集まるまちづくり目指す



長田区まちづくり推進課係長
川野欣樹

長田区は、六甲山系の南に带状に広がる神戸の旧市街地の西に位置し、JRおよび地下鉄新長田駅周辺は神戸の西の副都心になっている。

港まち神戸で長田区は、造船や鉄鋼など重厚長大産業の関連中小企業や、地場産業であるケミカルシューズなどの製造業が軒を連ね発展してきた。

商店街もかつては大変な活況を呈し大衆文化が花開いた。しかし、昭和四十年代から郊外に良好な住環境を求める人びとが転出しはじめ、人口減少、少子高齢化などいわゆるインナーシティ問題が顕著になっていた。

サロンコンサート

こうした中、平成七年一月の阪神淡路大震災で神戸市は大きな被害を受けた。とくに長田区では多くの尊い命が失われ、市街地の密集する南部地区ではかなりの広いエリアが火災で焼失してしまった。

区の人口はピーク時の昭和四十二年には約

二十一万一人だったが、震災直前には約十三万人、最近では約十万五千人にまで減少した。

震災後、安全なまちを目指し復興再開発事業、区画整理事業など都市計画事業を行い、まちづくりに取り組んできたが、いかに活力と魅力あふれるまちとして再生していくかが課題となっている。

長田区では震災前から区内の文化団体と連携して、区庁舎ギャラリーを使って毎月、クラシックを中心としたサロンコンサートを開催している。また震災後、十年四月に新長田駅前再開発ビル内に完成したホール（ピフレホール）を拠点に数々のコンサートを開いてきた。音楽は市民の心をいやし、勇気を与えている。

十一年から地元企業家、音楽関係者、行政が一体となって「音楽のまち長田」構想をスタートさせた。

これはアマチュアで活動するミュージシャンを広く公募して発表の場を提供、まちに若者を呼び戻し、公認のストリートミュージック

クを実施しながら、ミュージシャンを育て長田発の音楽が発信できればというものである。

その立ち上げとして、十一年五月、ゴールデンウィークに長田区内のまちづくり協議会主催のイベント「キラリ」ながた まちづくり夢フェスタ」に連動して「音楽のまち長田シンポジウム」を開催した。ストリートミュージックの展開で長田区が音楽を活用したまちづくりに取り組んでいくことを区民に問い掛け、対外的にアピールした。

そして、その直後の五月二十三日から、そのころ完成した新長田駅前広場を使って、ストリートライブを月二回開くことになった。

オーディション

当面、大阪の城天バンド（大阪城公園でストリート演奏を行っている



ストリートライブ オーディション



「音楽のまち長田」シンポジウム

ミュージシャン）などを招致して、新長田駅前でのストリートライブを展開する一方、長田区の登録ミュージシャンをつくろうと、十一年八月末に第一回目のオーディションを開催した。

応募は京阪神を中心に、遠くは愛知や東京から幅広く、また、バンド編成から弾き語り、ロック、ゴスペル、サルサなどさまざまなジャンルのグループ・個人がエントリー。三日間にわたって六十八組が演奏し、審査の結果、三十六組を登録することになった。オーディションはその後、二回開催し現在約八十組のミュージシャンが登録されている。

第一回目のオーディションを終えたころ、新長田駅南の商店街が連携し、約一カ月間、毎日曜日、「復興大バザール」というイベントを開いた。ここで登録ミュージシャンが各街角で演奏を行った。これが駅前広場以外での、地域と連携したストリート演奏の初めての試みとなった。

そしてこのバザールをきっかけに新長田駅南エリアでは各商業関係者が連携し、有志のグループ、アスタきらめき会（アスタは新長田駅南復興再開発事業区域の愛称）を発足させた。

福祉、環境といった問題とともにまちのにぎわいづくりのイベントに取り組んでいくこととなり、フリーマーケットなどの開催に合

わせて街角での登録ミュージシャンの演奏が行われるようになった。さらに他地域でも登録ミュージシャンの演奏の要請を受けることが多くなっていた。

こういった動きの中で、区内の学生や団体などにヒアリングを行いながら「音楽のまち長田構想」を策定し、目指すべき指針を組み立てていった。

さらに復興再開発エリアで、まちづくり協議会の「事業を進めていく中でもまちにぎわいを」との願いから十三年当初、暫定的なイベントホール「アスタスクエア」がオープンしたが、ここでもライブ演奏やオーディション、ゴスペルやシャンソン教室を行うなどさまざまな音楽イベントが開催されている。

復興記念事業

震災から七年目を迎え、震災時にお世話になった多くの方々に感謝の気持ちを込め、今年一月十七日から九月三十日まで神戸では市内全域を会場に神戸二十一世紀・復興記念事業が開催された。期間中は震災時の支援に対する感謝・光・花といったテーマでいろいろな取り組みが行われたが、長田区ではとくにまちにぎわいをと、地元団体、商業者などが連携し、新たな音楽イベントが多数実施された。

とくに九月二十三日には「長田ラテンミュージック ストリート」として開放的でノリ

の良いラテン音楽をメインに長田区の南部エリア全体を使った音楽イベントが開かれた。アスタスクエアで練習を重ねた地元スチールドラムバンドも演奏を披露し、好評を博した。

まちに若者を呼び戻し、音楽で活気づけるという発想のもとスタートした「音楽のまち長田」構想だが、当初は動きながら考える、いわば手探り状態で、果たしてうまくいくのかという不安もあった。しかし、多くの人がとが協働し、知恵を出し合って活動する中で、「音楽のまち長田」という言葉が少しずつ地域に根付いてきたのではないかと思っている。一方で、当初理想としていた音楽産業の興隆や長田発のメジャーミュージシャンの誕生など、実現に至っていないことも多い。

しかし、震災復興にまだまだ課題の多い長田で、まちの夢、魅力、活気、にぎわいということを考えたとき、「音楽のまち」という言葉はこれからもまちに活力を与えていく原動力になり得るだろうし、引き続き地域と連携しながら、関係者の協力を得て、活動を継続していくことが大事ではないかと思っている。



神戸二十一世紀復興記念事業
百人のゴスペル



まちかどライブ

類例なき野外円形劇場。パストラルホール 地域に根付いた音楽文化活動



周東町企画課
山口祐司

心の豊かさを求めて

日が沈むころ、周東町用田に架かる永安橋に立って、夕日を眺めていると、どこからともなく「夕焼け小焼け」のメロディが聞こえてくる。橋の欄干には、歌詞が刻み込まれている。散歩途中の老夫婦が立ち止まり、そのメロディに聞き入っている。そんなのどかな光景を目にすることができ、いつも音楽が響いている町、それが周東町である。

山口県の東部、島田川上流玖西盆地に位置する周東町は人口約一万五千人の文化の華咲く田園都市である。田んぼには毎年、黄金色の稲穂がこうべを垂れ、美食家の喉をうならせる。また、県内でも有数の牛肉の産地、周東町で生まれ育った「高森牛」も、高い評価を受けている。

町では、平成二年から「周東町食肉フェア」と題した食の祭典を開催し、高森牛の丸焼きや豚汁、雑炊などが振る舞われ、町内外からの多くの人でにぎわっている。周東町は稲作

と畜産を基幹産業に「農林畜産のまち」として発展してきた。

急激な社会の変化で私たちは、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」を求めるようになった。それは芸術・文化による心のいやしである。心いやされたいとき、小高い丘に建つ、「いつも音楽が響いている町・周東町」の、パストラルホールを訪ればよい。

ロマンチックな想い

青空の下、コンクリートの打ちっ放しがすがすがしい印象を与える野外劇場・アンフィシアターは収容人員千五百人。頭上の空を仰ぎながら、歌声を耳にすると、周囲の自然との調和が心に安らぎを与え、演奏者と観客の間に心地よい空間がうまれる。

アンフィシアターはアミューズメントのシンボルとして古代ギリシャの都市国家アクロポリスをモチーフに建設、平成六年オープンした。鉄筋コンクリート造り二階建て、延べ面積三千八百平方メートル、高さ一八・五メートル。外観

は円筒形と三角形になっており、総事業費は約十八億円。外部からの音を遮断し、音や振動が内部に伝わりやすい独立した構造は、音楽を満喫できることまがいなし。そのため野外コンサートや演劇、ダンスなど幅広い催しに使用されている。

先日、アンフィシアターに立ち、ステージから観客席を眺めているとステージの西側の山に夕日が沈もうとしていた。その後のステージを想像してみた。静かな夕暮れとともに暗闇が辺りを支配し、音楽が鳴り、劇が始まるうとしている。こんなにドラマチックな光景を目にすることができ、ロマンチックな想いを抱け

夕映えのパストラルホール



るところなのだ。

周東町パストラルホールは、アンフィシアターだけではなく、五百席ながら木の温かみにより心を和ませてくれるコンサートホールを備えている。音響の良さは、抜群である。ホール内のどの席に座ろうとも、生演奏の迫力が体感でき、ステージ上の演奏者と一体となることができる。

ホール開館の目玉として全四回のコンサートを指揮した三枝成彰氏も「それにしてもいいホールですね。音響もいいし、バックヤード、控室、すべてがとてもいい」と、絶賛された。ホールの完成で町民の文化・芸術に対する意識が変化し、感性が高まっていた。カラオケを歌って楽しむホールから心からうっとりするような音楽を楽しもうとする感性が芽生え、今、大きな財産となっている。

ウィンド・オーケストラ

施設整備と同時に、音楽文化を周東町に根付かせようとする若者の手で、パストラルホールの専属楽団「パストラル・ウィンド・オーケストラ」が結成された。ホールの公共性を考え、地域に根差した活動、音楽のジャンルにこだわらない活動を楽団の基本としている。一般的なコンサートではなく、地元の人々がパストラルホールのステージに上がって、ともに楽しむ音楽について学ぶ演奏会を企画

し続けている。

ウィンド・オーケストラは、都市部への若者の流出とは逆の流れを生み出し、自分たちの活動の場を求める若者によりパストラルホールでの交流が図られている。アマチュア集団であるがゆえに、個々の経験や考え方の溝を埋めていくのに二年を要したが、今では自分たちが周東町の文化の発信者だという信念で活動が続いている。

昨年六月策定した第四次周東町長期総合計画「周東 ときめきプラン21」では、文化創造と生涯学習を重点プロジェクトの一つとして掲げ、パ



ストラルホールを主会場とした周東オリジナル芸術祭の開催を計画している。町民にとつての発表、視聴、観覧の機会が増えることで、町民相互の交流や文化向上に

役立つはずである。見て、聞いて感じる文化と、歌って、踊って、体感する文化とが融合する「ときめきの町・周東町」独自の文化が、町民の手により花開こうとしている。

交流人口増える

全国各地で文化のまちづくり、魅力のあるまちづくりが盛んに叫ばれていたひと昔前、周東町はブームに乗ってホールを整備したわけではない。周東町の魅力を再発見するため、若者がわが町の魅力を再確認するため、そして、何よりも周東町民が周東町の文化、芸術に触れ、魅力のあるまちづくりの担い手となるために、である。

ホール整備後も若者の都会への流出はなお続いているが、ある現象を引き起こしている。交流人口の増加である。町外、はては広島など県外からの来場者も多々いる。また、パストラルホールで演奏を聞いた人による口コミが、交流人口の増加にひと役買っている。

耳を澄ましてください。

どこからともなく、子供たちの歌声や小鳥のさえずりが聞こえてくる。

これからの周東町が目指す道。それは、「幸せ 生きがい ときめきのまちづくり」である。

文化・芸術大国日本のなかで、ひととき輝く町・周東町は、輝き始めたばかりである。

パストラル・ウィンド・オーケストラ定期演奏会

お国訛り

の失敗

南北二百〇、四季折々の風情に満ちた石川の楽しみは幾つもあるが、初夏の山菜、秋のきのこ採りは格別。とくにきのこの在りかは、生前はわが子にすら教えず、大往生の際に子相伝するんだそうな。ほんまかいな。

実話 その①

とある酒席、能登の古老が「あんまり飲みなさんな。朝四時に起きて、裏山に苔採りにいかんかいね」と。「早起き苦手」と洩る小生に「苔は嫌いか」はあ「苔はうまいぞ」えっ「焼くのもいいがお汁の具が一番や」…。都会育ちのため、庭石にむす苔には一種憧れがあったが、苔を食すほど能登の人は貧しかったのかと近代日本の矛盾に憤りながらも、丁重にお断り。残念そうな老人の顔。数日後、門外不出の苔（きのこ）の楽しみを教えてくれようとしたことを知って、小生が老人以上に残念がったのはいうまでもない。

実話 その②

能登といえば新空港。リストラに同時多発

テロが重なった航空会社に十分な就航をお願いするのが目下の急務。「嗚呼きついきつい」との青息吐息を見かねて、金沢の経済人が慰労してくれたときのこと。人酒、酒酒、酒人。酒に飲まれてもう限界というときに「あんた若いけど、酒がきついやろう」十年前なら杯を重ねただろうが、寄る年波には勝てず「仕事も酒もきつい（しんどい）ですわ」と懷に飛び込んだつもりが「そやろ、もつと飲め飲め」…。なんて意地悪なんやろか。結局二日酔いの頭で「きつい（強い）」と知らされたのは翌朝のこと。仕事はきつく（強く）ないんですけど…。

実話 その③

色恋ものをこの辺で一つ。中学時代の友人の工場進出を祝って、地元加賀温泉郷で芸妓あげでのドンチャン騒ぎ。お開き間近に、妙齢のお姉様が「ねえ部長さん、今晩くどいてもいい」とにじり寄る。あの純朴な北陸氣質はどこへいったのかと嘆くわけもなく、大い

に期待したところ、「景気悪くってお客さんが全然なのよう」ふうん「他にいい仕事ないかしら」ドキッ、「公務員って良いわよねえ」はあ。延々と続く愚痴三昧。なんか違うんじやねえかと思いきや、結局バーでカクテルご馳走してさようなら。「くどく（ほやく・愚痴をこぼす）」の意味だそうで、いまさらわが至らなさを愚痴ってみても仕方ない夏の夜の儚き夢であった。

一言

葉や文化の違いはほんとに難しい。単一民族の他愛もない話でこれだから、国際社会で政治や宗教が絡めばなおさら厄介なはずであろう。近年、公立大学で異文化間コミュニケーション学科が大流行というのうなずける。

わが故郷の先人柳田国男翁は外交官の経験から民俗学を開いた。お国訛りの失敗から国際社会に思いをはせるのもよからうと、不惑の年を目前に大いに惑う今日このごろである。読者の皆さんの他山の石となることを。

コラム



田谷 聡

石川県企画開発部長



め ざみの里 = 山形県飯豊町

人の心にゆとりと安らぎを呼び起こし、老若男女から愛される音楽をテーマにまちづくりを進めている。文化の薫り高い町にしようという住民の熱意から誕生したイメージソング「めざみ」をはじめ、女声コーラスグループの結成・音楽祭の開催など子供から大人まで音楽に親しんでいる。





バンブーオーケストラ＝佐賀県東脊振村
竹楽器を使ったアマチュアでは、最初のオーケストラ。小学生から大人まで世代を超えて演奏活動を行っている。楽器は、10種類ほどでほとんどが手作り。材料にもこだわり地元の竹を使用している。自然からの恵み、竹楽器の持つ素朴でなつかしい、そして幻想的な音色は、不思議と聞く人を魅了する。



イタリアオルガン音楽アカデミー＝岐阜県白川町

パイプオルガンの建造家が白川町に移住してから「国際交流と音楽のまちづくり」に取り組んでいる。イタリアオルガン音楽アカデミーが国際音楽フェスティバルの一環として行われ、毎年全国各地から35人が参加。その中から最優秀者を選考し、イタリア・ピストイア市で開かれるオルガンアカデミーに招待している。

定音になっているウー・ン文響楽団ヨハン・シュトラウス アンサンブルのニューイヤーコンサート



カ ウェルホール＝鳥取県東伯町
農協が経営するカウベルホールでは、ピアノコンクールで中高校生部門のグランプリに和牛の子牛を一頭、小学生部門には、乳牛の子牛一頭を贈呈する。秋の収穫祭音楽祭では演奏会の休憩時間に地元のハム・ソーセージや梨ワイン・二十世紀梨などが振る舞われる。



合 唱コンクール＝愛媛県三瓶町
私たちが最初に触れた音楽。それは母に抱かれた子守歌だったのではなからうか。心と音楽はいつの時代にも必要だ。美しいハーモニーが地域の人びとを感動させ、全国の人びとの共感を呼ぶ。当町出身の詩人宮中雲子先生(第8回サトウハチロー賞受賞)の協力で平成10年から日本の合唱コンクール、宮中雲子音楽祭を実施している。



町 民オーケストラ＝北海道砂原町
さわらウインドオーケストラは「音楽のある町は平和で文化のある町に育つ」との願いを込めたまちづくりを目指して平成6年、町民オーケストラとして発足した。町内各種イベントへ花を添えるとともに、自主的に幼稚園や老人ホームへ訪問するなど、音楽いっぱいのもちづくりを実践している。



雅 楽体験教室＝埼玉県川口市
世界で最も古いオーケストラといわれる雅楽。昭和54年に設立された雅楽天神会は、宮内庁式部職楽部楽長補を主任講師に招いて活動し雅楽を通して青少年育成と国際文化交流を行っている。とくに中高校などに出向いて体験教室を開くなど普及にも努めている。地元はもとより茨城、神奈川県などでの出前学習は好評だ。



太鼓の里 = 石川県松任市

日本の祭りには欠かせない和太鼓。江戸時代初期の慶長年間、加賀藩の招請を受けた播磨の国の太鼓師が現在の松任市で創業したことで太鼓の里に。中でも原木の切り出しから仕上げに至るまで一貫生産する大太鼓は全国の7割のシェアを持つ。勇壮な炎太鼓は国内はもとより海外でも数多く公演している。



週末

ともなると各地でさまざまなイベントが催される。ここ十年近く、そうしたイベント情報の紙面での発信にかかわっている。しかし、これが実に大変。情報が集まらないのである。「そんなことはない。ちゃんとPRしている」という反論や「予算がなくてPRまでは手が回らない」という声も聞こえてきそう。そこでひとつ、発信する側から見たイベント情報について述べてみよう。

その前に、まず新聞の中のイベント情報の実情を知っておいてほしい。たとえば、A町で×月×日×時からBというイベントがあると。内容はこれこれ。記事にして数行。数十ページの新聞の中ではわずかなものだし、書くのも簡単だ。ただし、前もってこの情報が担当者に届いていければの話。

もし担当者が情報を持っていなければ、このわずかな数行を掘り起こすのに何時間もかかってしまうこともある。熊本には九十四の市町村があるが、へたをすると全部の市町村に問い合わせなければ、この情報は得られないかもしれない。主催者が地域の青年団や地域おこしグループだったりしたら、それでも情報をキャッチできないことがある。会場が使用予定のわかる既存の施設でなく、河川敷とか原野だったりすれば、もうお手上げだ。別に情報集めの大変さを強調したいわけ

はない。こう考えてみてほしいのだ。あなたが新聞社の情報面担当者で、すでに手元に紙面を作るだけの情報があると。さて、どうするか。あるかないかわからない情報探しに、そのうえ、何時間もかけるだろうか。

せっかくがんばったイベントだし、広く集客したいがそれほどの知名度はない。PR予算も、宣伝に割ける人手もない。どうすればいいのか。主催者からそんな話を聞けば、こう言うことにしている。

「ファクス一枚でいいんです」

「いつ、どこで、どんなイベントがあるのか」。それだけわかれば、問い合わせで肉付けするのは担当者の仕事だし、難しくも大変でもない。メモ書き程度のファクス一枚で、掲載の確率は格段に高くなると言っている。

付け加えるなら、ピンポイント攻撃がさらに効果的。新聞社は情報の入り口をいくつも持っているから、掲載

を希望する紙面やコーナーの担当部局を確認して、そこあてに送信する。代表電話で尋ねれば、たいてい教えてくれるはずだ。そのファクスが主催者の「一生懸命」が伝わるものなら、放つてはおけない、という気にさせる。

その一枚を新聞社だけでなくテレビやラジオ局、フリーペーパー、タウン誌、さらには他県のメディアに送ってもいいわけだ。十社に送って半分の社が紹介しただけでも、費用対効果（苦勞対効果とも言ってもいい）は相対的なものだ。イベントが控えていけば、きょう、あすからでもできる作戦ではないだろうか。もちろんイベントの中身が大切なことは言うまでもないが。

column

ファクス一枚大作戦



熊本日日新聞社編集委員
隈部 一雄



テアトロンとランパルホールでまちづくり 豊かな心育む音楽施設を整備



志度町企画課長
石原龍仁

推古天皇のころの創建と言われる四国八十

八カ所、名刹志度寺を中心に発展を遂げてきた志度町は、近年は高松市のベッドタウンとして、また、臨海工業団地、内陸工業団地、徳島文理大学の誘致などによる産業や教育、さらには瀬戸内海の優れた景観を有する大串半島、平賀源内旧邸、志度音楽ホールといった観光振興でも、独自の発展を遂げている。

まちづくりの基本理念に「町民生活の優先と文化創造」を掲げて、すべての住民が人間としてお互いの人権を尊重し、健康で生きがいを持ち、平和で人と人との愛と連帯が大切にされる住民本位のまちづくりを目指している。そして、住民が親しんできた「水」、豊かな自然を象徴する「緑」、志度寺や桐下駄などに代表される「歴史・伝統」、さらに、関西国際空港、瀬戸大橋、新高松空港の開通や開港にアクセスする高規格道路の整備、明石海峡大橋、四国横断自動車道など、インフラ整備からの町発展の「夢」をもとに、将来の都市像を「海・緑・ロマン 文化都市・シ

ド」と設定し、都市化を進めている。

ギリシヤ風の劇場

瀬戸内海国立公園の一角である大串半島の

先端部に建設した志度野外音楽広場「テアトロン」は、

ギリシヤの劇場をモチーフにした施設で、石のいす席五千の計一万人の収容



志度野外音楽広場テアトロン

能力を誇る。ギリシヤ風にしたのは、瀬戸内海の気候が地中海と似ており、実存の野外劇場にならった。ステージは直径二十六メートルの円形で、総事業費は約四億八千万円。平成三年

完成した。ロック、レゲエ、ジャズなどの演奏は、毎年、夏を彩るイベントとして定着しており、多くの若者が夢を追って集まり、夕間の中、演奏者のシルエットに幻想的な一時を過ごすことができる。スピッツやSPEDOなどのほか、地元アマチュアバンドの発表の場としても利用されており、若者の音楽への登竜門としても施設の存在価値を高めている。

質の高い音の響き

志度町の中央部である丘陵地には、徳島文理大学、総合運動公園、構造改善センター、コミュニティセンター、社会福祉センター、志度音楽ホールが集中して整備されており、文教ゾーンとして位置づけられている。中でも志度音楽ホールは、多目的施設として主に、オーケストラやピアノ、バイオリンなどの音楽演奏に利用されている。音響効果のすばらしさからこのホールの魅力を絶賛したフルート奏者の第一人者である故ジャン・ピエー

ル・ランバル氏が名誉館長に就任されたこともあり、ランバルメモリアルホールと呼ばれている。ランバル氏はフランス人で、昭和六十二年秋に来日した際、志度ホールで演奏したことが縁で町の要請を快諾して館長に。

毎月五百席のいすは、クラシックや各種演奏会のすばらしい音色を求めて集まる近隣市町からの人びとで埋まる。また、会館十周年を超え、この音楽ホールを中心に活動している青少年合唱団卒業生も大きく飛躍しており、志度音楽ホールの成果となって徐々に花開き始めている。

ロマンを誘うプロムナード

志度地区の中でも最も汚濁がひどかった弁天川は、地域住民の清掃協力を得なければならぬほどに傷んでいたが、近年、散策道路・プロムナードとして整備された。レンガ舗装と石橋、さらには樹木、花木が周辺環境にマッチして植えられ、散策の場として親しまれるようになってきている。水質の改善は、下水道整備事業の完成を待たねばならないが、その所々には、センサーによって流れるように配置された音楽灯籠があり、総合運動公園に隣接するランバル広場まで歩くとうっすらと汗をかき、音楽による心と体の健康に寄与している。

音楽のまちづくりとして、住民意識の中に

自然と溶け込む施設として整備されたが、水の浄化ができると、さらにその景観が高まり、住民に愛される施設になると期待されている。音楽灯籠が、心ない人に壊されたため現在、音楽を流すことを中断している。

ハイドンフェスティバル

音楽は、世界の言葉であり、聴く者に感動を与える。本町は、音楽のまちづくりが縁で

ハイドンゆかりのオーストリア・アイゼンシュタット市と平成五年友好姉妹都市の縁組みをした。同年から現地のハイドンフィルハーモニー管弦楽団を招いて、四年に一度ハイドンフェスティバルを開催。また、青少年合唱団をヨーロッパに派遣しており、すばらしい成果を修め、音楽を志す若者を大きくはぐくんでいる。このほか、リトアニアなど内外の交響楽団によるコンサート、ピアノリサイタルも数多く開いている。気候、風土、歴史を異にする人との触れ合いは、クラシックから現代音楽までに広がり、地理的な条件を超え、平和と人権を尊重する人のネットワークとして、近隣市町に大きな影響を及ぼし始めている。



青少年合唱団
志度音楽ホール



まちづくりの理念・アイデンティティは、その町、その町によって異なっていることが大切ではないかと考える。こうした観点から音楽のまちづくりを目指す志度町は、公共施設を中心として音楽が流れる町にしていこうと、情報機器を利用して常に催しものが発信できることや音楽の種類によって行き先を選べる身体障害者にもやさしいまちづくりを住民の総意として、また住民が参画する中で推

進していきたい。

また、隣接する津田町、大川町、寒川町、長尾町と十四年四月一日に合併して、「さぬき市」となるが、これまではぐくんできた本町のアイデンティティを失うことなく、より輝きを増し、全国に誇れる地域エリアとなるように、取り組んでいきたい。

ハイドンフェスティバル

海と大地の交響曲有明讃歌を制作 歌詞は住民から公募、五楽章で構成



有明広域市町村圏協議会事務局長
中尾清志

有明広域市町村圏は、福岡県の最南端に位置し、面積二六三・五三平方^キ、人口約二十六万二千人の圏域である。石炭関連産業を中心に発展してきた大牟田市をはじめ、柳川市、瀬高町、大和町、三橋町、山川町、高田町の二市五町で構成されている。南部から東部にかけて低い山々や丘陵が連なり、西の有明海に向かって筑後平野の南部を占める平坦地が広がり、一大穀倉地帯を形成している。また、日本でも珍しい四六^ヘの干満差で広大な干潟を現す有明海は、魚介類の宝庫となっており、ノリの養殖

広域圏共同事業

本圏域では、昭和六十三年度から県内では初めて、広域圏主催による共同事業に取り組んでいる。

広域行政を推進するには、行政機構の圏域住民へのPR、協調と連帯を深めることが大切である。また六十一年に当圏域の中核施設として建設した大牟田文化会館を多くの人に利用してもらうとともに全体の文化施設のシンボルであるという認識を持ってもらうことが重要なことから、住民総参加の共同事業を始めた。

圏域には、それぞれの地域に伝承されている民俗芸能が豊富にあり、第一回、第二回は、こうした圏域の伝統芸能を紹介する「有明郷土民俗芸能大会」を開催した。第三回と第四回は、圏域内で活動している各音楽団体などによる「夢・ふれあい音楽祭」を、第五回は、圏域七市町を七色の虹に見立て、レーザー光

線を取り入れて「音と光のシンフォニー」「ふるさと虹色芸能祭」を開催した。

六回目からは当分の間「音楽を中心にしたまちづくり」を進めることにし、圏内出身プロの演奏からアマチュア（子供から大人まで）の合唱と多くの出演者として「クリスマスに贈る音楽市」を開催した。七回目は、音楽がワイワイ「ありあけの町」「クリスマスに贈る音楽市Ⅱ」と題し、音楽を通しての地域おこし、まちづくりの活動を展開している大牟田奏友会とブリヂストン吹奏楽団久留米とのジョイントコンサートを開催した。

さらに、圏域の合唱団によって平成四年に結成された「ありあけ合唱団」にも参加してもらい、クリスマスイブにふさわしい曲を披露した。

習志野高吹奏楽部

八回目は、全国でもトップクラスの水準を持つ千葉県習志野市立習志野高校吹奏楽部をメインゲストに迎え、「ヤングフェスタ96イ



ンネイブルランド」「がんばる先生のバンドクリニク」「スプリングコンサート96」を三日間にわたって開催した。地元の中高校吹奏楽部との合同パレード、マーチング、公開リハーサル、コンサートとバラエティに富んだもので大盛況だった。

九回目は、「習志野高校吹奏楽部夏期合宿への地元高校生や指導者の派遣」「シティブンドフェスティバルイン有明97」「日本縦断カラオケ道場」と音楽のあるまちをコンセプトにした三つの多様なイベントを開いた。これらは文化会館十周年記念事業として行った。

九年度は、共同事業を始めて十回目という節目を迎えた。しかし、圏域の基幹産業であった三井三池炭鉱が閉山したことから地域再生に向けて大事なスタートの年と位置づけた。

このような中で、それぞれの地域性を生かし、自分たちが住んでいるまちをモチーフに圏域の文化の向上と発展を図るため、有明広域市町村圏の「合唱付きシンフォニー制作事業」に九、十年度の二カ年にわたって取り組むことになった。

作詞は、当圏域の在住者、通勤通学者や縁のある人を対象に公募した。圏域内外から五十九編の応募があり、その中から一般二、小学生三の合計五編を採用した。

作曲は、吹奏楽と音楽教育の分野を中心に

全国、海外でも活躍している東京在住の後藤洋先生に委嘱した。二月と五月に圏内地域を視察してもらい、各地のイメージを曲にしていたいただいた。

感動に酔いしれ

こうして自然豊かな有明の海や大地を称える「有明讃歌」が完成した。「海と大地」（合唱と吹奏楽）、「刻の記憶」（吹奏楽）、「わたしのまち」（合唱と吹奏楽）、「未来へのマーチ」（吹奏楽）、「母なるうみよ」（合唱と吹奏楽）の五楽章から成る交響曲だ。有明海に生きる人たちの喜び、誇り、感謝、夢などが盛り込まれている。十一年二月、制作発表を兼ね「有明浪漫コンサート」を開催した。

演奏は市民吹奏楽団大牟田奏友会と尼崎市民吹奏楽団。合唱はこの日の発表のために編成した有明広域圏合唱団、圏域や熊本県荒尾市の合唱団やコーラスグループの皆さんに参加してもらった。会場を埋め尽くした観客は、総勢四百人の演奏や合唱に聞き入り、住民自らの手でつくり、歌い上げる曲ができた感動に酔いしれた。

また、「有明讃歌」が将来にわたり、より多くの人びとに親しまれ、歌い続けられることを願ってCDを制作し、音楽の授業やその他多くの機会に活用していただくように、圏域内の学校や公的機関などに配布した。

広がる連携の動き

その後は「有明讃歌」の普及、定着を目的とした事業展開として、十二回目は、JRの「鉄道の日」とタイアップして圏内の中高生・一般に参加を求めて大牟田駅前でのコンサートを開催、大牟田奏友会、大牟田高校の協力による圏内小中高校への出前コンサートを実施した。十三回目は、習志野高校吹奏楽部の九州公演の一環として五年ぶりに同校吹奏楽部を招いた。「有明浪漫スプリングコンサート2001IN大牟田」と題する演奏会には同校に加え地元の吹奏楽団、中高校の吹奏楽部はもとより熊本県の中高校からの参加も得て、大牟田駅前でのコンサート、街頭パレード、文化会館でのコンサートを三部構成により開催した。

このように、共同事業による取り組みは関係者によい刺激となり、徐々にではあるが活動も活発になってきている。音楽を通して、圏域はもとより県境を越えた連携が広がってきており、今後「有明讃歌」を広く内外にアピールしていきたい。また、イベント開催時のみの一過性の交流ではなく、息の長い交流が活発に行われ、郷土文化の振興と圏域住民の融和と連携を深め、ひいては、地域の活性化につなげていければと思っている。



有明浪漫
スプリングパレード

デジタルアーカイブによる地域振興について

総務省では、「デジタル・ミュージアム構想」の一環として、平成十二年度から地域の博物館や美術館などの文化施設に保存されている有形の文化財や、地域の祭礼などの無形の文化財（以下、「地域文化」という）などをデジタル・データ化する経費について、地方交付税による支援措置を講じている。本件については、その概要を本誌四月号で紹介しているが、ここではデジタルアーカイブによる地域振興について地方公共団体の事例を紹介しながら考えてみたい。

デジタルコンテンツの制作支援の概要

近年の生活様式および価値観の变化などにより、継承が困難になりつつある地域文化を保存する手段の一つとして、デジタルアーカイブの概念を採り入れ、高精細で半永久的な保存が可能なデジタル情報として、地域文化を電子的に保存・継承する。さらに、これらの情報財を素材に、デジタル・ネットワーク技術を活用して地域の活性化に積極的に活用しようとするのが今回の取り組みである。

財政措置のスキームとして、都道府県分については、普通交付税の単位費用（平成十三年度…総額二十五

億円）で、市町村分については、特別交付税（同…総額十億円）で措置した。十二年度における地方公共団体（市町村）の取り組み状況は、別表のとおりである。

地方公共団体の取り組み事例

(1) 岐阜県 地域情報文化育成事業

岐阜県では、総務省の取り組みを踏まえ、デジタル・ミュージアム構想を推進するとともに、学卒未就職者などの雇用を創出するため、十二年度からコンテンツ制作に取り組み、県内の市町村に対してもコンテンツ制作を促し、地域情報文化産業の育成を図る「地域情報文化育成事業」を実施している。

具体的には、

- ① 県内市町村およびNPOなど民間団体が学卒未就職者を雇用してデジタルアーカイブの題材収集・コンテンツ制作、インターネットによる情報発信を行う取り組みに対し補助を行う
- ② 県庁各課が所管するデジタル化されていない資産を題材に、モデルコンテンツの制作やインターネットによる情報発信活動を実施する。委託先において学卒未就職者を新たに雇用する
- ③ 市町村職員などを「デジタルアーカイブ推進リーダー」として養成研修を実施し、地域の主婦や高齢者にアーカイブ化に必要な知識や、就労に必要な基礎知識を習得させる。

こうした取り組みを通じ、デジタルアーカイブの推進による貴重な文化遺産などの保存・継承のみならず、地域で雇用の場の創出を図るとともに、地域の情報関連産業の活性化が図られている。

(2) 岐阜県河合村

(3) 岩手県東和町

岩手県東和町は、日本近代美術の先駆者である萬鉄五郎を顕彰する萬鉄五郎記念美術館が中心となり、地

域のボランティアと協力しながら、地域文化情報のデジタルアーカイブを実施している。町内に残っている文化財を中心に、映像によるデータベース化を図っている。ここでは、機器類の操作、シナリオ、画像、音楽、撮影、ナレーションなどをオリジナルのボランティアによる「映像制作委員会」が主体となって制作を行っている。このほか、地元中学校のクラブ活動にも映像制作が採り入れられ、全国的なコンクールなどにも出品している。また、十三年度は、総務省の「地域活力創出プラン」を活用して、データベース構築を実施してい

デジタルコンテンツの制作に対する支援について（市町村分、実績）

制度の概要：地域の美術館・博物館などに収蔵されている有形の文化財や地域の祭礼などの無形の文化財など広義の「地域文化」をデジタルデータ化する経費について地方交付税措置を講じる。

対象事業：広く地域文化一般をデジタル化する事業

対象経費：撮影許可料、企画づくり、撮影料、デジタル化経費、書誌データ作成費、インターネット変換経費、その他措置内容（平成12年度）

都道府県…普通交付税（単位費用）による措置 総額25億円

→ 普通交付税として、東京都を除く46道府県に措置

市町村…特別交付税による措置 総額 5億円

〔市町村の実績〕

45市町村においてデジタルコンテンツを制作（詳細は、下記のとおり）

事業費：総額350,000千円程度

都道府県名	市町村名	コ ン テ ン ツ の 内 容	メ デ ィ ア			事業費 (千円)
			静止画	動 画	音	
北海道	函館市	市博物館所蔵資料	500	5		1,000
岩手県	花巻市	市博物館所蔵品	9,056			400
	湯田町	川村美術館展示作品	20			158
宮城県	仙台市	市所蔵美術資料他	519	20		12,800
	雄勝町	町の歴史・生活・漁業・硯	100	5		9,000
福島県	原町市	福島県指定史跡泉庵寺跡	56	13		11,400
栃木県	壬生町	おもちゃ博物館	13,000			14,685
千葉県	館山市	南総里見八犬伝資料	600			2,950
神奈川県	横須賀市	朝井閑右衛門の人と芸術		1		6,010
新潟県	十日町市	笹山遺跡出土品	57			1,000
石川県	小松市	宮本三郎美術館所蔵品	150			4,475
	加賀市	古九谷焼、加賀の茶文化、美術館所蔵品	枚数未定			29,000
長野県	松本市	北アルプスの四季～松本城		1	1	9,500
	上田市	信濃国分寺資料館資料他	4,042	110		9,500
	丸子町	依田神社太神楽獅子舞他		3		1,200
	阿智村	熊谷元一氏の写真・映像	50,093	3		20,000
	南信濃村	南信濃村祭ライブラリー		5		27,650
岐阜県	大垣市	市川里美絵本原画他	110	2		1,550
	中津川市	民俗芸能・伝統芸能他	1,000	4		7,300
	羽島市	市指定文化財門空仏	424			4,201
	安八町	ふるさと歴史回廊・今昔図鑑	390	2		10,162
	春日村	春日村の葉草・森の国通信	150			4,330
	伊自良村	文化の里収蔵資料	10,220			8,400
	東白川村	廃仏毀釈資料	22			1,340
	白川村	世界文化遺産冬の白川郷	600			6,000
	瑞浪市	方言で綴るみずなみの民話			1	2,238
	恵那市	中山道広重美術館資料他	622		14	9,700
	各務原市	炬燵遺跡・大牧古墳他	116			1,995
	上石津町	多自然居住生活環境他	1,080	5		3,465
	谷汲村	華厳寺・西界山横蔵寺他	300			3,080
	加子母村	尾張藩三浦山・三ヶ村山守文書	4,000			1,600
	河合村	雪の文化・産業	800			3,800
	武芸川町	仙涯和尚	248	4		23,142
愛知県	蒲郡市	生命の海科学館所蔵品	300	200		17,320
滋賀県	大津市	市所蔵歴史資料・大津祭他	400	20		4,409
	能登川町	古文書・地域文化他	3,842			11,926
京都府	美山町	美山民俗資料館所蔵品他	210			2,100
大阪府	羽曳野市	萱田八幡宮所蔵資料他	51			12,495
兵庫県	香住町	香住町文化財（内容未定）				279
岡山県	倉敷市	倉敷市美観地区		本数未定		14,975
山口県	防府市	防府天満宮所蔵資料他	384			2,000
香川県	綾上町	地域伝統芸術		9		4,135
鳥取県	用瀬町	江波の三番叟		1		1,540
福岡県	北九州市	産業技術史				19,425
沖縄県	読谷村	太平洋戦争沖縄戦他	490			5,000
22道府県	45市町村		103,952	413	16	348,635

平成13年度における支援措置

総額35億円（都道府県分 25億円〔同額、普通交付税〕、市町村分 10億円〔5億円増、特別交付税〕）

る。

（4）京都市Ⅱ京都デジタルアーカイブ

構想

京都市では、①京都の豊かな歴

史・文化・伝統資産のデジタル化による次世代への継承②デジタル化した京都の「資産」の有効活用による新産業の創出③著作権などの知的財

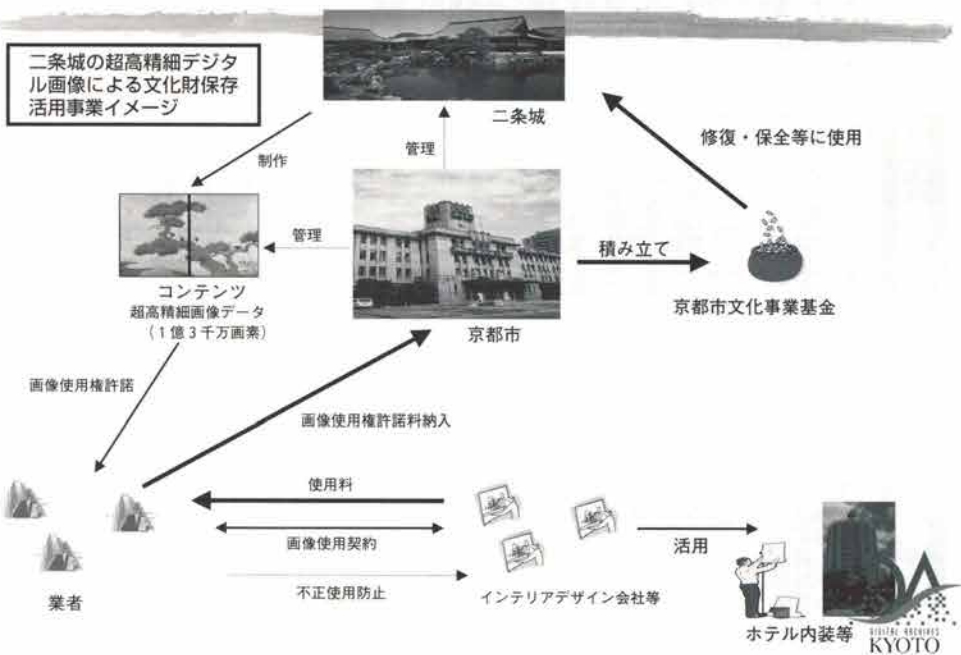
産権を円滑に処理できる環境の整備を目指し、産官学が連携して「京都デジタルアーカイブ構想」を推進している。昨年八月に京都デジタルア

ーカイブ研究センターを設立し、さまざまなプロジェクトを実施しているが、その一環として、世界遺産に登録されている二条城の障壁画（重要文化財）三百二十七枚を超高精細画像（一億三千万画素）でデジタル化し、文化財の保存・継承、レブリカの制作・展示、ミュージアムグッズや図録の制作などのさまざまな用途への活用にとどまらず、第三者への画像使用権許諾による許諾料収入を京都市文化事業基金として積み立て、文化財の修復・保全などに使用している。この事例は、世界遺産という歴史的・文化的な著名な優位性はあるものの、デジタルアーカイブを活用した成功例といえる。

今後の方向性

デジタルアーカイブの取り組みについては、解決すべき課題も存在する。最たる課題が著作権の処理であり、地方公共団体においては、著作権に対する認識が希薄なままデジタルアーカイブに取り組み、結果として、資産としての活用がままならないという事例も散見される。

著作権処理が問題となるのは、①



著作権処理に係る明確な指標がない
②制作したデジタルコンテンツの二次利用（第三者などによる利用許可、デジタルコンテンツの販売など）が、

権利者との関係でスムーズにできないといった状況であり、今後、デジタルアーカイブを推進するためには、専門知識を持たない担当者にも

- *岐阜県庁 <http://www.pref.gifu.jp> *岐阜県河合村 <http://www.kawai.org>
- *岩手県東和町 <http://www.town.towa.iwate.jp>
- *萬鉄五郎記念美術館 <http://www.michinoku.ne.jp/~towa/m0701.html>
- *京都市 <http://www.city.kyoto.jp/koho/index.html>
- *京都デジタルアーカイブ研究センター <http://www.kyoto-archives.gr.jp>
- *デジタルミュージアム推進協議会 <http://www.digital-museum.gr.jp>
- *デジタルアーカイブ推進協議会 <http://www.jdaa.gr.jp>

分かりやすく、また、二次利用を見据えた適切な権利処理が行える仕組みの整備が必要となる。現在、デジタルアーカイブ推進協議会において、「デジタルアーカイブ権利問題ガイドライン（案）」および「デジタルアーカイブ（権利問題と契約文例）」が提示されており、これらを参考にしつつさらに検討を進める必要がある。

地方分権の進展に伴い、地域アイデンティティの再発見・確立がますます重視されつつある。また、現在「e-Japan重点計画」により超高速ネットワークインフラなどの整備や、地方公共団体においても総合行政ネットワークの整備が進められており、今後、地域文化などを地方公共団体独自の「デジタル資産」として保持・活用していく環境が整うことになる。地方公共団体においては、デジタルアーカイブを、単に地域文化を保存・継承する手段として活用するにとどまらず、学校教育や生涯教育への活用により地域文化への関心を促し、その結果として、地域おこしの人材育成や新たな文化の創造、地域に根差した映像・情報関連産業の創出など、地域振興の観点から取り組むことが求められる。

地域産品・ 観光おこし 研修会

買う側の 立場で 特産品の 生産・加工を

（財）地域活性化センターは、（社）日本観光協会との共催により、「地域産品・観光おこし研修会」を実施した。この研修会は、各地で物産や観光振興を担当している人を対象に、それぞれの地域資源を生かした産品開発や観光資源づくりの手法などを習得し、地域の活性化につなげることを目的として開催しており、今年で十年目。

これまで首都圏で開催しており、参加者からも好評をいただいていたが、今年からはさらに地域の実情にあった、より具体的な内容の研修会



小林英俊氏の講演

参した特産品のアドバイス会を実施。その後、「地域特産品が観光を変えろ」と題し、買う側の気持ちで特産品を生産・加工することの重要性、マーケティング戦略について講義。続いてグループ演習の題材地である北海道虻田町や熊本県白水村の担当者が、その自治体における取り組み状況などを発表、グループ演習に入った。はじめこそ静かな雰囲気だったが、次第に活気に満ちてきて、最高潮に達したとき終了の時間となった。

二日目は、各グループが演習結果を発表したが、各グループからはユニークな意見や提案が数多く出された。これに引き続き、須川講師がコメントするなど、会場は、講師と参加者が一体となった。

岡山県では出前研修会

一方、当センターでは、前述の研修会を希望のあった会場へ出向いて開催する「出前研修会」も実施している。

本年度は、八月六、七の両日、岡山市において開催した。主催は、（財）岡山県市町村振興協会で、県内の特産品開発やマーケティングに的を絞った「売れる産品」をテーマに実施し

た。

岡山県は、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ数多くの資源があるが、収支的には苦戦を強いられている産品もあり、講師からは素材をうまく活用することの重要性などの助言があった。

昨今の経済情勢の中で、地方の特産品を取り巻く環境も厳しさを増しており、実務に携わる担当者への悩みは尽きない。今回実施した一連の研修会に参加した人も同じ悩みを共有しており、専門の講師から知識を習得し、懇切丁寧なアドバイスを受ける機会を得て非常に満足そうであった。

当センターとしては、今後もこのような研修会を開催することで多くの地域の要望にこたえ、一層地域の活性化の役に立てればと思っ



出前研修会グループ演習

（財）地域活性化センター業務第二課
副参事 飯野秀仁

どのようなまちが待っているのか、どのような人びとに出会えるのか。大きな期待と希望を抱きながら、地域リーダー養成塾の仲間とともに九月五日、あこがれのヨーロッパへ旅立った。

今回の訪問地は、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス。まちの持つ自信と歴史の重みに圧倒され続け、そこかしこに漂う大きな安らぎに抱かれた十日間の旅だった。そして、まちと歴史を愛している人びとと、まちとともに輝いている人びとらしい笑顔に出会うことができた。ここでは、印象に残っているいくつかのまちについて紹介したい。

自転車優先の交通政策

オランダ・アムステルダム市では、交通政策について話を聞いた。このまちは元来、自動車交通を考慮していないため、交通渋滞や駐車場不足が大きな問題となっていた。一九七五年以降、自転車交通を促進

ヨーロッパ研修報告

DENMARK NETHERLAND BELGIUM FRENCH

する施策を行ってきたが、九二年に自動車の減少を住民投票で決定して以来、さらに積極的に施策を進めている。

路面電車、バスなどの公共交通機関充実のほか、自転車専用レーン、赤信号で四十五秒以上待たせない自



オランダ・アムステルダム市交通運送インフラストラクチャー局政策策アドバイザーからレクチャーを受ける

転車用信号の設置、駐輪場の整備など、自転車を利用しやすいような多くの環境が整備されている。

その結果、交通機関として自転車を利用している人の割合が七五年の二五%から、現在では五〇%にまで増加。市長も

自転車で通勤しているという。車の通りが少ないまちの中は、夜中まで人びとの声や雑踏が聞こえ非常ににぎやかで、人がまちの主役となっている。

市内には、古いまち並みや建物などが保存されていて、見ただけで傾いていることが分かるほどの家や隣家と支え合いながら立っている家を見かけた。また、樹木やきれいに整備され手入れされている公園もいたるところにある。硬くなりがちな都市の中で、みどりの空間は必要要素。まち並みや建物、みどりを楽しみながら散策することができる。アムステルダム市は、みどりと水と歴史と文化、各種要素の整った不思議な魅力のあるまちだった。

いやしを感じる 中世のまち並み

ベルギーではブリュージュを見学した。水の都というだけあってそこかしこに運河がめぐり、白壁や赤レ

人がまちづくりの主役に

平和の尊さを痛感



ベルギーのルデュー村にて(右から4人目が筆者)

まちには人びとの心をとらえ、安らぎを与える何かを持っているのかもしれない。

住民の自信と誇り

ベルギー・ルデューは人口約四百人(週末は四百五十人)の村。古本でまちの衰退に歯止めを掛けている。廃屋を改築したり賃貸にしたりして、住民が自前の資金で古本のまちをつくり上げた。本屋を専業にしている家は二軒のみでほとんどが兼業だが、週末には本屋が二十一軒、レストランや工房などを含めると四十五軒が開店。年間で売買される古本の数は五十万冊、約二十万人が訪れるという。現実を離れて訪れたくなるような雰囲気を持つまちだった。

この村は遊興地の近くにあり、週末に遊びに訪れた人びとが気軽に寄り易い地理的な利点がある。演劇の公演を誘致するなど年間を通じて大勢の人びとの興味をひくよう工夫をこらしているというが、約七十万円の年間予算でよくやっていると感じてしまった。

商工会の理事長と村の観光担当局長がまちづくりについて説明してくれた話しぶりに表れているように、住民の自信と誇りがまちを良くして

いくのだらう。人びとがそのように思えるまちづくりができたらずばらしいと思う。

農家で民宿したフランス・パリ郊外の村。パリほどの大きな都市でも、一歩郊外に出ると広い畑の広がる田舎まちで、大切な歴史と文化が人びとの生活の中に息づいたまま残っている。古いまちに住む人びとは、昔ながらの温かい気持ちを持ち続けていて、パリからほんの二十⁺しか離れていない村で、ごくごく素朴な人びとに出会えたことは、非常に貴重な経験となった。無理を言って泊めてもらった私たちにに対し、民宿のご夫婦をはじめ夕食をいただいたレストランの家族から、感謝してもしきれないほどの温かい思い出をお土産にもらった。

歴史の積み重ね

ヨーロッパは、どこへ行っても歴史の上に積み重ねてきた自信が感じられる。「どうだ!」と大きな声で突き付けられているような存在感のあるまちはかりだった。人びとが自信を持って生き生きと暮らしていると、まちも自信を持つのだろう。人はまちをつくり、守り、育てていくもの。愛情を注がれたまちはさらに

彩りを増し、人びとをやさしく包むまちに育つと思う。歴史も文化も人とまちとの愛情で大切に守り育てられてきたものと実感できる十日間だった。まちの中で人が主役になれるまちづくり、それがヨーロッパに行つて一番大切と感じたことだった。

また、私たちが、パリ郊外の農村に滞在中、怪しげな片言の英会話で苦笑いの輪を大きく広げ、フランス人の家族から盛大な夕食の歓迎を受けていたほんの数時間前、大西洋を隔てたニューヨークでは大きなテロ事件が起こり、多くの人が亡くなり、多くの人が亡くなった。私たちがそれを知ったのは、翌朝、民宿のお母さんが焼いてくれたチョコレートケーキと杏ヶ崎を味わっている朝食の席。偶然の一致ではあるが、平和の尊さとありがたさを痛感させられた旅でもあった。

串橋祥子

全国地域リーダー養成塾塾生
新潟県上越市地球環境課係長



フランス・パリ郊外の民宿農家ご夫婦にみんなで感謝

TOPICS 全国朝市サミット、函館で開催

四分科会で市場の活性化を検討

北海道函館市商業振興課主事
阿部貴樹

函館市は、観光地として全国的に知られ多くの観光客が函館山から夜景見学、異国情緒漂うまち並みの散策、そして函館朝市を訪れる。

朝市は、戦後「闇市」として開かれ、市民の市場として活気を見せていた。その後、観光名所として紹介サミット開会式



サミットメインフォーラム会場

されてからは、市民の足が遠のき、観光客だけの「市場」に変わりつつある。

近年の小売市場を取り巻く環境は、郊外型大型店やロードサイドショップの相次ぐ出店で大きく変化してきている。新しい時代に対応した

サービスが求められる反面、施設の老朽化、後継者難などを抱えている。こうした諸課題を、朝市をはじめとする小売市場関係者で協議し、市場の振興、活性化を図ろうと九月二十七、二十八、二十九の三日間「第七回全国朝市サミットin函館2001」を開催した。

これまでの全体会議に加え、参加者全員で議論するため今回初めてテーマ別に四会場で分科会を開いた。

① インターネットを体験

テーマは、それぞれ、小売市場の活性化に関連するもので、第一分科会は「市場の広域連携について」と題して、流通、百貨店関係者を招き、

第二分科会は、「インターネットとその活用」をテーマに、(株)楽天市場の本城横之介副社長を招き、インターネットを体験してもらいなが

ら、ネット市場の現状や今後の情報化の動向について講演してもらった。第三分科会のテーマは、「観光と市場」。特別パネラーとして女優で「はこだて観光大使」の朝加真由美さんを招き、これからの観光と市場とのかかわり、観光客から見た魅力ある市場の姿について討議した。

第四分科会は、「まちと市場の魅力づくりと実践例」をテーマに、行政、地元商店街組合、まちづくり会社、公立はこだて未来大学の学生代表らを招き、函館駅前再開発計画を紹介しながら商業を通じてのまちの魅力づくり、朝市の果たす役割について討議した。

井戸端会議の開催も

これら各分科会で特筆すべき点を挙げると、第一分科会では、百貨店関係者から、個別の市場だけで商品開発や販売するのではなく、全国の市場をネットワーク化し、商品開発すれば魅力ある商品が創造され、販路の拡大にもつながると助言があった。第二分科会では、各市場とも情報

化に乗り遅れていることを認識し、インターネットばかりでなく、関連サービスについて積極的に研究し、実現に向けて努力すべきだという意見が出された。

第三分科会では、市民の市場として復活を目指すことを最優先に考えるべきだが、市民、観光客に対し、心が通う対面販売をしなければ、支持されないという厳しい意見が出た。

第四分科会では、函館駅前の再開発にあたって中心市街地としてに

ぎわいを取り戻すために朝市に期待することは大きいとの意見が多かった。今後、サミットでの議論を踏まえ、市内小売市場との連携をさらに深め、市民に支持される地域密着型市場を目指すため、市民との井戸端会議的な会合を積極的に開催しなければならないと感じた。



物産展での活イカ釣り

TOPICS 全国唯一の高層科学館

「スペースパーク」がオープン



福島県郡山市ふれあい科学館長
永戸 法夫

郡山市は、福島県の中央に位置した人口三十三万六千人のまちで、経済県都と称されるように産業活動が活発である。

本市では、四半世紀の懸案であった郡山駅西口の再開発事業を契機に、高層ビルの最上部に、全国的にもほとんど例のない都市型の科学館「郡山市ふれあい科学館スペースパーク」を建設し、この十月一日にオープンした。

スペースパークは、宇宙をテーマとした県内初の理工系科学館である。近年の子供たちの理科嫌いや科学技術離れへの対応、科学技術の普及を通じた生涯学習活動の活性化といった観点に加え、駅前立地の特性を生かし、都心部の回遊性や集客力の向上など、中心市街地の活性化も視野に入れた施設で、本市の二十一世紀を象徴する文化施設として位置づけている。

当館は、郡山駅西口再開発ビル「ビッグアイ」の二十階から二十四階にあり、宇宙劇場、展望ゾーン、

展示ゾーン、研修ゾーンの四つから成る。総事業費は四十四億円。

★宇宙劇場（二十三階・二十四階）
直径二十三メートルの傾斜型ドームスクリーンと二百三十四の座席があり、三万八千個の星を映し出す最新型のプラネタリウム放映機や視界いっぱい広がる迫力のある全天周映像装置のほか、最新の情報を提供するデジキャンバスなどを備えている。

★展望ゾーン（二十二階）
地上九十六メートルのロビーからは、眼下に広がる市街地や知恵子抄で有名な安達太良山などの眺望を楽しめる。また、郡山市発展の歴史を再現した全国で一番大きい鉄道ジオラマ（Nゲージ）があり、明治時代以降、「水と緑」を創造しながら発展してきた郡山の歴史を現在に伝えている。

★展示ゾーン（二十一階）
「宇宙開発」や「未知なる宇宙」、「地球環境」などをテーマとしたコーナーがあり、宇宙飛行士の訓練や宇宙での生活などを疑似体験できる参加体験型の、五十一の展示物が設

置されている。

また、科学、宇宙への興味や関心を高めるワークショップやサイエンスショーも毎日開催している。

★研修ゾーン（二十階）
多目的研修室やパソコン工房、実

験工房などがあり、クラブ活動や講座などに利用されている。

一方、オープンを記念して十月十四日には日本科学未来館館長で宇宙飛行士の毛利衛氏が「宇宙からの贈りもの」と題して講演したほか、この春結成した「日本宇宙少年団こおりやま分団」のお披露目や国立天文台ハワイ観測所（すばる望遠鏡）とのテレビ会議を行った。

このイベントには、名誉館長に就任した漫画家の松本零士氏（科学館キャラクター制作）や国立天文台広報普及室長で天文学者の渡部潤一氏もテレビ会議などに参加した。

この科学館には、最新の機器や設備が備えられているが、重要なのは、来館者がいかに満足し、何度も科学館を訪れたいと思えるような施設にすることである。全国的にはプラネタリウムや科学館が衰退していることから、人と人との触れ合いを大切にした新たな視点で運営していきたい。

日本宇宙少年団こおりやま分団のお披露目



毛利衛
松本零士

科学館キャラクタのエンゼルナ

©松本零士/郡山市

Series

地域づくり団体探訪

田舎倶楽部

北海道恵庭市

恵庭市は、新千歳空港から電車で約二十五分、札幌市と千歳市の中間に位置している。冬も比較的暖かく、積雪も少ない。住み良いまちであり、道内でも有数の人口増加都市として成長している。降り立った駅は「恵み野」とい

う美しい名を持ち、それだけで実り豊かな土地を連想させる。

まちを散策すると、色鮮やかな花々に囲まれた家々が目に付く。清流と美しい景観を保つ茂漁川では人びとが憩い、郊外に足を延ばすと広大な農地に目を奪われる。

そうした恵みの大地で活動しているのが、田舎倶楽部である。「地産地消」をキーワードに、地域で採れた農産物を、地域の中で消費する、そうしたライフスタイルを提唱し、実践しているグループである。

奥さんのひと言

「農業の問題というと、もっぱら生産者の側の問題と思われがちだが、

地産地消が キーワード 農業問題は消費者の視点で



代表世話人の中島興世氏

農業問題は消費者にとっても、生命を支える食にかか

そうではないのです」——恵庭市の元農政課長で田舎倶楽部代表世話人の

中島興世さんは語る。そのように認識させたのは、大都市から恵庭市に引越してきた友人の奥さんのひと言であった。「こんなにおいしくて、新鮮で、安全な野菜を農家から直接買えるなんて、夢みたい」。

後継者がいない。農業は儲からない。農家を取り巻く環境は厳しい。中島さん自身も、このような農業問題は、生産者側の問題と考えていた。

わる大切な問題だということ、先のひと言で気付かされたのだという。

野菜トラストの仕組み

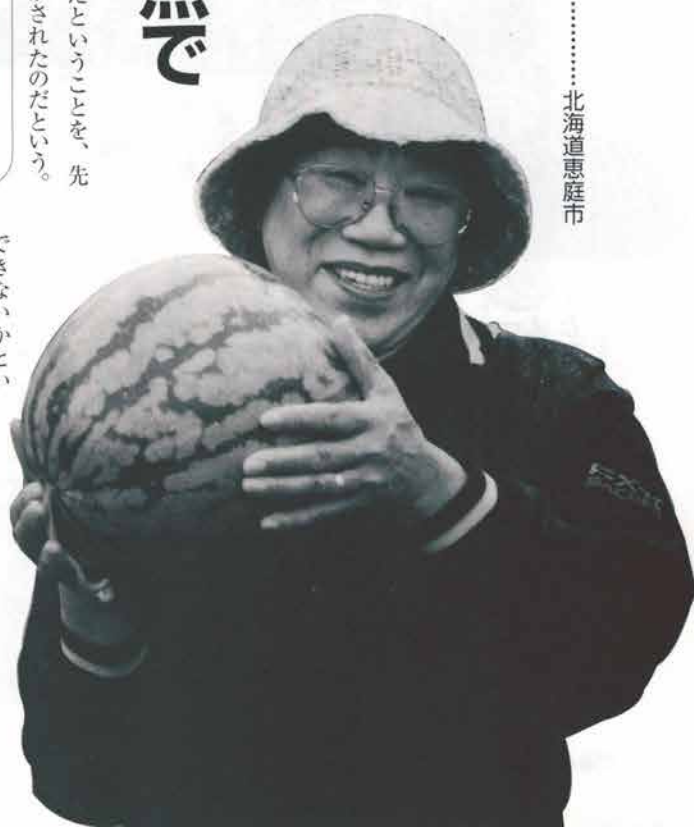
新鮮で安全な食材を手に入れるために、消費者の側から農家を支えていく方法はないのか。そうしたことから考え出されたのが、野菜トラストの仕組みである。

「もともと、酒トラストをヒントに考えた仕組みなんです」と話す中島さん。酒トラストとは、消費者がお金を出し合って基金をつくり、酒樽を買収し込むことによって、酒蔵を支える仕組みで、酒蔵は販売先を心配せずに酒造りに専念することができると。その仕組みを、農業にも応用

できないかという考えから出発したという。

たとえば、スイカを一戸あたり三万五千円で作ってくださると農家にお願ひし、お金を出し合う仲間を募って春先にはお金を支払ってしまふ。豊作であればできた分だけ収穫できるが、冷害で収穫が少なくても、お金は返ってこない。こうした農業生産の持つリスクを、消費者が負担するシステムなのである。

採れたスイカの配達にはしないので、お客さんが直接取りに行く。草取りなど手伝えることはしてもらってよいし、収穫にはできるだけ参加



してもらおう。農家は、販売先や価格を心配せずに、安心して野菜づくりを専念できる。こうした仕組みによって、農家の負担を軽くし、消費者

が積極的に農業にかかわる形での交流を確立しようというのである。

農家とのつながり



カボチャの収穫

現在、このような仕組みによって生産されているのは、スイカ、カボチャ、ジャガイモの三種類。「スイカは、あまり市場に出回らない品種で甘くて非常に人気があるし、昨年はカボチャの産量が素晴らしかった」と中島さん。

もちろん、農業は自然が相手である。天候不順で満足な収穫ができなかった年もある。でも、会員が「実際に野菜の収穫に参加することによって、農家とのつながりが生まれる。農家の奥さんたちが地元の食材で田舎料理を作り、パーティを開いてくれたこともあった。大盛況で、残った料理を持ち帰ろうと奪い合いになったほど」と中島さんは笑う。会員の中には、農家と個人的に親しくなり、田舎倶楽部の活動の枠を超えて、付き合いが始まった方々もいるという。



地元の食材を昔ながらのレシピで調理

野菜トラストという仕組みから、農家と消費者の交流がさまざまな形で、誕生しているのである。そうした交流の仕掛けも、田舎倶楽部の活動の一部であるという。

広がる活動の輪

「農業を単に生産者の側から見るのではなく、消費者の側から、あるいは、まちづくりの視点から見ることが非常に重要であると思う」と中島さんは強調する。

今年で田舎倶楽部の活動は六年目を迎えた。「まだまだ、準備段階。恵庭市には、広大な農地があり、六万五千人の市民が暮らしている。小さいながらも活動を続けて、さまざまなノウハウを獲得しながら、農家と市民との交流を進めたい」と中島さんは今後の抱負を述べた。

今、田舎倶楽部の活動の輪は江別市や南幌町などの周辺地域にも広がりをみせている。

地産地消の活動は、着実に北の大地に芽吹き始めている。

財地活性化センターコンサルタント業務課 副参事 日下 智

田舎倶楽部
プロフィール

●設立年 平成八年一月 ●設立主体 自主的組織 ●運営主体 自主的組織
●代表者 佐伯昇 ●会員数 三十人
●事務局連絡先 〒061-1404 北海道恵庭市上山口二七〇-二三三 二三三-三八三八

魅力ある農村づくり目指し

茶屋を経営

理念は
地域活性化

柳田國男が、佐々木喜善の語った民話をまとめ、明治四十三年に自費出版した『遠野物語』により、民話のふるさととして全国的に知られる岩手県遠野市。民話は今も語り継がれ、豊かな自然は訪れる者を民話の世界へと思いをはせさせる。

同市の綾織地区を中心に、「女性がいきいきとして輝く、魅力ある農村」づくりに取り組んでいるのが、「あやおり夢を咲かせる女性の会」の皆さんである。

会の結成は トイレ設置がきっかけ

会の結成は、平成六年三月。同地区に県営は場整備事業が導入されるにあたって、女性のためのトイレ設置を要望するため、菊池ナヨさんら

が呼び掛けたのがきっかけで、二十

一人の女性が集まった。これが実り、田んぼの真ん中に、休憩室を兼ね備えた曲り家風の公衆トイレが整備された。珍しさもあってか、当時は多くの見学者が訪れた。管理は、現在でも会員たちの手で行われている。

活動の初期段階においては、男性だけに任せず、女性の声を農村の環境づくりに反映させようと集落排水や、は場整備などの学習会を開き、女性の立場から提言を行ってきた。

また、EM菌を使った生ゴミのリサイクルの普及にも取り組むなど、会の活動は一定の成果を収めてきた。

このような中で、次に何に取り組めばよいのか模索が始まった。会長の菊池さんが以前学んだことがあるKJ法を使って会員の意見集約を図

り、①夢を語ること

(農家が取っておやつを

売するような店を持つ)

②自然と共生する地域

づくり③次世代のために

④女性の生きがいづくり

の四つの方向性をまとめ、会は、これに沿って活動している。

強い思いに 市幹部が決断

そんな折、遠野に道の駅ができるらしい、との情報が入ってきた。次の展開を図るために願ってもない機会であり、市の担当課長を定例会に呼んで確認したところ、それは事実で綾織地区にとの説明だった。すかさず、自分たちの店を計画に乗せてもらうよう申し入れたが、既に設計



真ん中が菊池さん

も終わっており、レストランと喫茶店が入ることになっているという。五十席ものレストラン経営は自分たちだけでは困難であり、喫茶店ではやりがいがない。「農業女性が希望を持って生きがいづくりに取り組める店を出したい」と、もし店を持たせてもらえるなら勤め先をやめてもとの強い思いだった。その熱意と迫力に、市の担当課長はその場で設置



を決断してくれたという。

道の駅・遠野風の丘に同会が営業する「夢咲き茶屋」がオープンしたのは、平成十年六月。わずかに四坪ほどの食堂兼菓子販売所で、「かねなり」や「きりせんしょ」といった地域特産のおやつ、おにぎり、そばなどを製造・販売しており、会員は全員農作業があるため、交代制で切り盛りしている。

メニューを決めるに当たっては、自分が客なら何が欲しいかを第一に

考え、会員全員が一人二、三品ずつ

持ち寄った。同じ品物であっても、家庭により味や作り方は違う。すべてに味やコストなどの検討を加え、「会員全員の思いが入ったオリジナル商品」は作り上げられていった。

うけた手づくりの味 売り上げが倍増

練りに練られたメニュー構成や価格、手づくりの味がうけ、店は大繁盛。売り上げは当初見込みの二倍にもなり、翌年度には、会員の出資でつくった企業組合「夢咲き茶屋」を法人化し、経営に当たっている。

組合と女性の会とは一体であり、企業組合化したとはいえ、その経営理念は、あくまで地域の活性化にある。単なる利益追求ではなく、農業者の生きがいや社会参加、世代間交流、他のグループとの連携を目指す一つの手段としての位置付けを徹底している。「私たちだけがいい思いをしていても、地域全体は豊かになれない」。取材中、菊池さんが何度も繰り返した言葉だ。米の粉、野菜などの材料は、

組合員から仕入れるだけでなく、若

者の農業担い手グループからも積極的に仕入れるとともに、採れたものはすべて買い取るという条件で、中学校に地域のお年寄りを先生とした学校農園を設けてもらうなどの取り組みも行っている。

実現した世代間交流 フオーラムも開催

平成十一年からは、四匹の綿羊を飼い始めた。遠野では昔はこの農家も羊を飼い、羊毛の機織りが盛んだった。そういう文化を子供たちにも伝えたい、という思いからである。置き場所もないまま機織り機も購入したが、小学校の児童会室に置かせてもらうことができ、毛刈りや機織りの体験会を行うことで、世代間交流も実現した。機織りなどの技術の修得は、冬場は農作業が暇になるので自分たちの生きがいづくりにもなる。

また、今年一月には、「こんな町に住みたい、こんな町にしたいフオーラム」を初めて開催した。自分たちの住む地域を、まず自分たちで考えようと、中学生からお年寄りまで幅広い世代が集まり、ふるさとの未来を語り合った。中学生たちは、事前に全校で話し合ったうえで、参加

してくれたそうである。

綾織地区にとどまらず、広域の交流も行っている。菊池さんは北東北広域連携推進協議会の委員も務めており、同委員会の「食」の分科会に出席した際、地元の鍋料理が話題になったのがきっかけで、「北東北ナベナベサミット」を二月に主催した。

「鍋」と「夜なべ」をかけたネーミングだが、岩手、秋田、青森の北東北三県から持ち寄った九種類の自慢の鍋をつつきながら、和気あいあいと地域の未来を夜なべで語り合った。大変な好評を博し、持ち回りで開催しようという話もあるが、「わが家のナベサミット」の形ででも独自に取り組めないか検討中である。

女性の会の定例会は、毎月第二月曜日。いまだに全員参加が続いており、今年になって会員が九人増えて二十五人となり、二十代から七十代までの女性たちが、活発な活動を展開中である。「地域はもつとよくなるといふことを、私たちが広げたい」と菊池さん。

女性の会の皆さんは、その名のとおり、一つひとつ、地域に夢を咲かせ続けている。

（財）地域活性化センター研修交流課
副参事 嘉村隆浩



修了者研修会

研修会初日はまず、冒険家大場満郎氏が「私の冒険人生」と題して講演。同氏は世界で唯一、南極と北極を単独で歩行横断し、平成十二年六月に植村直己冒険賞を受賞した。現在は地元、山形県最上町でアースアカデミー大場満郎冒険学校を開校している。実体験に基づいた話は大変面白く、目標に向かって進む生き方に大勢の参加者が感動していた。

続いて、森巖夫前リーダー養成塾塾長（明海大学教授）をコーディネーターに迎え、矢野学（新潟県安塚町長）、高木美保（女優・エッセイスト）、宮里徳夫（かりゆし塾同窓会顧問・代表幹事、リーダー養成塾第十一期修了生）、原田正司（総務省自治行政局自治政策課長）の各氏が「わがまちづくりをどう進めるか」というテーマでパネルディスカッションを行った。会場からの質問にパネリストが答える形式を取り、熱い議論が交わされた。

夕方からは修了者、現役塾生、新旧講師陣を交えた交流会が開催され、世代、地域を超えての交流が図られた。懐かしい講師のあいさつや、参加者の地元紹介などで会場は盛り上がり、情報交換し合うだけではない。

【財地域活性化センターは第八回全国地域リーダー養成塾修了者研修会を十月四五の両日、東京都港区の虎ノ門パストラルで開催した。この研修会は、これまでにリーダー養成塾で学んだ修了者を対象に自己啓発や意識の高揚を図るとともに、主任講師や修了者相互間の交流を通じて地域リーダーとしてのレベルアップ、そのネットワーク化を促進することを目的に開催している。第一期から第十二期までの修了者数は、三百五十五人に上り、全国各地で活躍している。今回の研修会には、これら修了者のほか現役の第十三期塾生三十四人も加わり、総勢九十人が参加した。

年々広がる卒塾生のネットワーク



①大場満郎氏の講演
②夕方から開かれた交流会
③二日目に開かれた分科会

く、親睦も深め合った。

二日目は、参加者が四グループに分かれ、それぞれのテーマで分科会が行われた。

いずれも、新旧のリーダー養成塾講師が担当し、第一分科会は猪爪範子講師（前主任講師・地域総合研究所研究員）による「まちづくり活動の進め方」、第二分科会は岡崎昌之講師（前主任講師・法政大学教授）による「まちで食える仕事をつくる」、第三分科会は宮口佃塾講師（前主任講師・早稲田大学教授）による「いま市町村合併を考える」、第四分科会是小田切徳美講師（主任講師・東京大学大学院助教授）による「中山間地域の振興を考える」といったテーマで行われた。修了者や塾生の実践報告を基に、講師と参加者同士がそれぞれの考えをぶつけ合い、熱い議論が繰り広げられた。

年々増えていく修了者のネットワークが、どんどん広がっていくのが感じられ、地域間交流などを通じた、リーダー養成塾修了者のこれからの活動がますます楽しみに感じられる研修会であった。

【財地域活性化センター研修交流課
副参事 荒矢大輔

EVENT

第15回
地域イベント実務
研修会



時代の変化に対応し、住民にやる気を

「第十五回地域イベント実務研修会」は、九月五日から七日まで企画入門、同二十六日から二十八日まで実践応用の二コースに分かれ、それぞれ東京都文京区の東京弥生会館で開催された。

この研修会は自治体や地域づくり団体のイベント担当者が対象で、今年で設立十六年目を迎えた財地域活性化センターが主催する研修事業の中で最も歴史がある。

企画入門コースは初めて地域イベントの担当者になった人を対象に、「地域イベントとは何か」「地域イベントの魅力」などをテーマに、(株)

アップリエート代表取締役の二瓶長記氏を主任講師として講義とグループワークが行われた。同氏はビデオによる全国各地のイベントの事例紹介を交えた講義を行い、コンセプトとコア(核)イベントの重要性などについて語った。

特別講義は「第五回ふるさとイベント大賞」で大賞を受賞した新潟県十日町地域広域事務組合の「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2000」の総合ディレクターを務めた北川フラム氏を講師に招いて実施。同氏はまちなかの公共空間に設置されるアートによるまちづく

り、そしてアートによるイベントの可能性について説明した。

五班に分かれたグループワークでは、各自が持ち寄った地域のバ

ンフレットなどから一つの地域を取り上げ、新しいイベントを考案した。基本コンセプト、コアイベントおよびサブ(付帯)イベント、期待するイベント効果などを一枚の用紙にまとめ、各班の代表がOHPを使って発表を行った。

一方、実践応用コースは地域イベントに携わった経験を有する人を対象に、「マンネリ化した地域イベントを打破する方法」「時代に呼応した新しい地域イベントのあり方」などをテーマにして、(株)地域戦略研究所所長の新藤健一郎氏を講師として講義とグループワークが行われた。同氏は自ら各地で手掛けたコンサルティングの事例に基づき、約百三十枚のスライドを使った実践的な講義を行い、イベントを成功させるうえでの「住民のやる気」と「時代の変

化への対応」の重要性などについて述べた。

グループワークでは、地域資源を生かした新たな「伝説」を創作した。そしてこれを柱とした七枚の企画書をまとめ、その概要を書き込んだ模造紙を使って各班の代表が発表した。

両コースのグループワークでは講師が具体的なアドバイスや講評を行った。研修終了後、各班の代表者にメンバー全員の修了証が授与された。

参加者からは「全国各地の実例を挙げての講義により、自分の住む地域を再認識することができた」「さまざまな地域・年代の方と意見交換ができ、大変参考になった」など講義、グループワークに関する声が寄せられた。また懇親会では参加者が持ち寄った地域産品を交換したことから「地域の特産品の紹介ができてよかった」と好評であった。

今回参加された人には、研修会で培ったイベントに関するさまざまな手法やノウハウ、そして人的ネットワークを大いに活用して、新しいイベントの立ち上げ、そしてマンネリ化しているイベントについてはその再活性化を目指してほしい。

(財)地域活性化センター業務第一課
副参事 宮本明人

地域 だより

「米百俵」の精神を行政に 新潟県巻町

巻町は、小泉純一郎首相が所信表明で表明した「米百俵」の精神を行政に生かそうと「米百俵利活用研究会」を発足させ、具体案づくりに取り組んでいる。

戊辰戦争で財政状況が悪化していた長岡藩に米を送った同藩の支藩三根山藩は巻町にある。

同研究会は庁内各課の計十三人で組織。これまで米を送った船着き場などの史跡を視察したり、三根山藩の関係者から史実を教わった。また高速道路のインターチェンジに「米百俵のふるさと」の観光案内板も設置した。

研究会では十二月中旬に成果をまとめ、来年度予算に反映させる方針。目下、ホームページ

ージでの紹介、史実教育、高校生を対象とした奨学金の設定などが浮かんでおり、具体化によって町の活性化につなげる方針。

千年の学校でまちづくり 静岡県本川根町

本川根町は、町の歴史、文化を再認識し、体験学習を通じてまちづくりを推進しようとして「千年の学校」を開設した。

町全体をキャンパスと位置づけ、入学者は単に学ぶだけでなく行政に提言したり、実践しながら地域づくりにひと役買ってもらおうというのが狙い。名誉学長は木村尚三郎東大名誉教授、学長は鈴木敏夫町長で、講師は町内に住む各分野の専門家。町民ならだれでも学ぶことができ、さまざまなまちづくり会議や町長との懇談会に参加できる。

講座は「地域学のすすめ」と題し毎月一回、第三土曜日に二時間半のスケジュールで行う。一回目は十一月十七日「地域」をテーマに実施したのをはじめ、芸能、観光、歴

史、匠など計十コマを予定。来年三月には県内外の関係者を招いてのフォーラムを計画している。

戦国ロケットを打ち上げ 滋賀県米原町

関ヶ原の合戦で徳川家康と戦った石田三成が、戦況を連絡するのに使ったのろしが起

源といわれる戦国時代の「ロケット」「流星」が、十月二十日、米原町で十発打ち上げられた。県の無形民俗文化財で、流星の「伝承の火」を絶やさないよう、歴史的文化を通じて地域おこしにつなげるのが目的。約三〇の火薬を詰めた長さ五メートルの竹ざおの先端

を制作した。

条例、住民参加、農山漁村活性化、産業育成、環境、少子・高齢化、地域文化振興などあらゆる行政課題に対応する最新事例を紹介しているの

で、新規施策立案の参考に、また地域政策の実態研究にぜひ活用いただきたい。

会員には既に配布しているが、ご希望の場合は事例集一冊千五百円、CD-ROM一枚千円で販売している。

●問い合わせ先 企画調査課
☎〇三・五二〇二・六一三三

センター 通信

「13年度地域政策の動向」 を発行

（財）地域活性化センターは、総務省自治行政局地域振興課が行った「平成13年度地域政策の動向」に基づき、各市区町村の新規施策を取りまとめた事例集およびCD-ROM

首長来訪

▼新潟県五泉市 五十嵐基市長（10月23日）

に矢つりの日傘（パラシュート）を付けて点火すると三百メートルの高さまで上昇。落ちてくる傘を拾うと縁起が良いという伝えがある。

技術を受け継ぐ地元の流星保存会と町では、打ち上げの後継者と費用ねん出が大きな課題としている。

●12月2日
富山県朝日町、立山町
いつでもどこでもビーチボール

●12月9日
長野県木曽福島町、開田村
南信州秋景色

●12月16日
岩手県遠野市、釜石市
風が誘う遠野路

●12月23日
熊本県水俣市、長陽村
伝統の塩づくり

●12月30日
滋賀県石部町、水口町、土山町
東海道宿場巡り

●1月6日
佐賀県千代田町、相知町
花と歴史と自然に出会う町
TBS系、毎週日曜日
午前7時〜午前7時30分
※一部放送日時が異なる地域があります。



大洗に世界の海がやってきます。

2002・3・21 OPEN!



AQUA WORLD

アクアワールド

茨城県大洗水族館

<http://www.net-ibaraki.ne.jp/aquaworld/>



入館料金：大人(個人)1,600円、子供(小中学生)800円、(団体)100円、10-12月期600円、●幼児(個人)300円、(団体)250円、1名様特別1500円。
 *料金は消費税がふまわっています。 *団体は20人以上で利用して頂きます。 *幼児は第3子以下とします。 *学生料金は社会系・国・私立、小中学校の学校法人と異なります。
 茨城県大洗市大洗町5-2-3 Tel.029-267-5151 Fax.029-267-5920 E-mail:naraiamiboo.net-ibaraki.ne.jp



GARLIK & BEEF FESTIVAL

にんにくと
べごまつり



毎年10月初旬、収穫の季節を迎えるころになると、町一番のイベント「にんにくとべごまつり」が行われます。

大黒森の大自然の中、7～8時間かけて炭火でじっくりと焼き上げる田子の「黒べご」（黒毛和牛）の丸焼きをメインに、町の特産品である田子にんにくをふんだんに使った特製のタレで、広い草原でのびのびと育った田子牛のバーベキューを味わう焼き肉大パーティーです。

今年で16回を数えるこのまつりには、例年約6000人もの観光客が訪れ、地元田子高校の生徒を中心に役職員や町の老若男女約400人がボランティアで運営に参加し、町内外からのお客さまをお迎えします。

姉妹都市である米国ギルロイ市や韓国端山市からは、ガーリッククイーンや市長などたくさんの友人たちが訪れ、国際色豊かにまつりを盛り上げてくれます。

「にんにくのつかみどり」や「にんにくとばし大会」、「にんにく相撲大会」などユニークなアトラクションが盛りだくさんで、食べて、飲んで、見て、楽しむにぎやかなイベントです。

EVENT CORNER

12月のイベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

12月5日～7日
東村（福島県）

12月13日～14日
楢川村（長野県）

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

12月3日～7日
喜多方市（福島県）

12月10日～13日
只見町（福島県）

12月20日～21日
飯南町（三重県）



10月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

10月1日～3日
高山市（岐阜県）
飛騨高山フェア①

10月17日～18日
県南地域地場産業振興対策協議会（福島県）
白河地方フェスティバルin東京②

10月23日～25日
五泉ファッションタウン推進協議会（新潟県）
五泉ファッションフェアin東京

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

10月1日～5日
京都府
京都の工芸作品展③

10月15日～19日
佐賀県
佐賀を奏でるシンフォニー写真展

10月22日～24日
広陵町（奈良県）
靴下のリサイクルを考えるための作品展

10月29日～11月2日
函館市（北海道）
函館市観光ポスター展

編集後記

▼今回は心を和ませ、いやしを与えてくれる「音楽」を取り上げてみた。

まちづくりのきっかけ、題材はさまざま。北海道新冠町の場合、「文化の記録」ともいべきレコードが時代とともに消えうせるのは忍びない」と音楽愛好家が、レコードによる文化香る町構想を提言。行政が呼応して収蔵施設をつくった。

この考えに共鳴した人がレコードを寄贈。その数は何と六十三万枚にも上った。まちづくりをまさに全国の人が支えたケースで、今後一つでも多く新冠町に似た取り組みが行われるのを期待したい。

▼特集、カラオケラビアでは民間主導による事例を何件か紹介した。行政がやりにくい、また民間ならではの発想によるまちづくりだ。その果たした役割は大きなものがある。官民が協働すればその力、波及効果は計り知れない。財政問題が常につきまとうが、こういう厳しい時こそお互い知恵を絞って施策を進めてほしい。

▼二十一世紀最初の年も残すところあとわずかとなった。当誌は地域づくりに取り組んでおられる皆さんの一助になれば、を主眼に編集しているが、企画面などでアドバイスがあれば遠慮なくお寄せください。

（やなぎこ）

●10月号
特集II 地域資源で景観づくり

地域づくり12月号

平成13年12月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

印刷＝大日本印刷株式会社

夢、
G
e
t
!!

数字選択ゲームが止まらない。



二科展デザイン部 入選作品
榛澤 照生

富士銀行のATMにて、数字選択式宝くじが購入できます。ただし、購入するにはその銀行のキャッシュカードを保有していることが必要で、また一部店舗および機種によりお取扱いできない場合があります。詳しくは、当該金融機関にご照会下さい。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。



財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は財日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。